

---

# 雨男、雨女

クラッキー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨男、雨女

### 【Nコード】

N0292Q

### 【作者名】

クラッキー

### 【あらすじ】

真夏のある日。仕事帰りに、にわか雨が降り始め、駅の出口で途方にくれる俺。

迎えを呼ぼうにも、電話が繋がらない。どうしようかと、思案していると、懐かしい記憶がよみがえってきた。

思春期の甘酸っぱい記憶。楽しくて悲しい記憶。

そういえば、『あの時』も、こんな天気だったなあ…。

## 第一章 【序】

仕事帰りの電車の中。

何気なく窓の外に目をやると、空は真っ黒い雲におおわれていた。

夏、真っ盛りのこの日。

先程まで、うだるような暑さだったこの日。

（これは一雨来るな。）

（しまった！今日、傘を持ってねえぞ！家に着くまで、もつかない。）

願いも虚しく、程なくして雨は降り出す。

改札を抜け、駅の出口に來ると、既に土砂降りの雨だった。

（クソー！今日、雨が降るって言ってたか？）

（にわか雨だろうから、すぐに止むかな…。）

（迎えても呼ぶかな……。）

携帯を取り出し、電話を掛ける。

……………、出ない。

（何だよ、アイツ！何してるんだよ！）

家まで、徒歩十五分の道程。

ずぶ濡れ覚悟で、走って帰るか、アイツが着信に気付くのを待つか。

思案のしどころだった。

ふと周りを見渡す。

俺と同じように、迎えを呼ぼうとする者。

折り畳み式の傘を取り出し、帰って行く者。

覚悟を決め、傘なしで土砂降りの雨の中へ、駆け出して行く者。

仕事帰りのサラリーマンや、OLで溢れ返っている駅の出口は、かなり騒がしかった。

（そういえば、あの時もこんな天気だったよな…。）

懐かしい記憶が、よみがえってきた。

甘酸っぱくて、切ない記憶…。

楽しくて、悲しい記憶…。

## 第一章 【一】

中学三年の夏休み直前。

この日の空は、午後になると曇り始め、帰る頃には真っ黒になっていた。

先程までの、うだるような暑さは和らぎ、東風が強く吹いている。

俺は既に、部活は引退し、学校が終わると真っ直ぐ家に帰る。

5

（これは一雨来るな。家までもつかないかな…。）

（天気予報、チェックしてきた良かった。ちゃんと傘を持ってるし。）

案の定、途中で雨は降り始め、雨足もどんどん強くなる。

（傘さしてても、ずぶ濡れじゃねえか！）

そして、自宅マンションに辿り着くと、入口に人影を見つける。  
制服姿の女の子だ。

傍らには自転車があり、傘は持っていないようだった。

(見たこと無い娘だな。雨宿りでもしてるのか？高校生か？)

俺が通ってる中学の制服とは、明らかに違う。

近付いて行くと、背はそんなに高くないが、その娘はかなり大人っぽく見えた。

そして、肩まで伸びた黒髪は、雨に濡れて妙に色っぽい。

顔は…。

(やべえ、可愛い…。)

「傘、ないんですか？」

「…？あつ！う、うん…。」

思わず声を掛けてしまったが、警戒されてしまったようだった。

「良かったら、これ、どうぞ。」

「えっ、でも…。」

「俺の家、このマンションだから、今日はもう、必要ないし。」

「あ、ありがとう…。」

少し、警戒は解かれたようだった。

(うわっ、透けてるじゃん！)

彼女の制服は、雨に濡れ、ピンク色の下着が透けて見える。

思春期の男子には、刺激が強過ぎる光景。

「あっ、そうだ！ちょっと待ってて貰えますか？」

「…?」

急いで、階段を駆け上がり、家に戻る。

家の中で、雨合羽を探すも見つからない。

仕方なく、ジャージの上着を取り出し、もう一度、家を出る。

階段を駆け降り、マンションの入口に戻ると、彼女はまだ、そこにいてくれた。

「良かったら、これ着て行って下さい！俺のだから、ちょっと大きいかも知れませんが、ちゃんと洗ってありますから。」

「何でジャージ？」

「えーと…、そのー…。」

彼女は、俺の視線をたどり…。

「きゃーっ！エッチー！」

「あつ、えつ、違っ！」

「ふふっ、冗談だよ！赤くなっちゃって、可愛いねえ、少年！」

「…。」

（そんなに、歳、違わねえはずなのに、子供扱いしやがって！）

「キミ、水野正宏くんでしょ？」

「何で名前、知って…。」

「私、キミの中学の先輩だよ！今年の春に、卒業したんだけど。」

（だからと言って、何で俺の名前まで知ってるんだ？）

「俺と面識、ありましたか？」

「えっ！さ、さあ、どうでしょうっ？」

思わせ振りの言葉。

「…。」

(一個上に、こんなに可愛い女の知り合いなんて、いないはずなんだが…。)

「これ、また此处に持って来ればいい？」

「はい、いつでも構わないんで。」

「それじゃあ、明後日に持って来るよ。ジャージを、ちゃんと洗濯して返したいから。」

「洗濯なんかしなくても、大丈夫ですけど…。」

(むしろ、そのまま返してくれたほうが…、って俺は変態か！)

「ダメだよ！私の匂いが付いちゃうから。それで、変なことするでしょ、キミ？」

「…！し、し、しません！」

(何でバレたんだー！)

「動揺するところが怪しい。」

そう言って、俺をからかうように笑う彼女。

「明後日も、俺は同じぐらいの時間に帰って来るんで。」

「了解！じゃあ、雨も小降りになって来たから、私、行くね。」

「気を付けて。」

「ありがとう！じゃあね！」

満面の笑みで俺に手を振り、彼女は行ってしまった。

当初の警戒心は、何処へやら…。

（しかし、可愛い人だったなあ…。）

（一体、誰なんだろう…、って名前聞くの忘れた！）

中学三年の七月、俺は彼女に出会った。

正確には、再会した。

## 第一章 【二】

そして、約束の日。

放課後、はやる気持ちを抑え切れず、帰宅を急ぐ俺。

（今日は、名前を聞かないと…。）

（それから、連絡先を聞いて…。）

（もうすぐ夏休みだから、何処かへ遊びに行けたらいいなあ…、彼女と…。）

自分が受験生であることを忘れ、そんなことを考えていた。

早足で帰宅していたが、気が付くと走り出していた。

マンションの入口に辿り着くが、当然、彼女はまだ来ていない。

（何を焦ってるんだ、俺は…。）

うだるような暑さの中、走って帰宅した俺は、流れる汗を拭いてもせ

ずに彼女を待つ。

「今日は早いね！どうしたの？汗だくじゃん！」

呼吸が整った頃、彼女が自転車に乗って現れる。

「今日は暑いから…。」

しょうもない、言い訳をする。

「確かに、今日も暑いけど…。運動した後みたいだよ。」

彼女も、ほんのり汗をかいている。

照りつける夏の日差しに、汗が反射して、彼女の笑顔をより際立たせる。

「あー…、それで…。」

(キミの名前は?)

「はい、ジャージと傘！」

自転車を降りた彼女は、名前を聞こうとした俺を制するように、ジャージと傘を差し出す。

「はあ、どつも…。」

「ちゃんと洗濯してあるけど、変なことに使わないでよ!」

「だ、だから、使わないって言ってるじゃないですか!」

「一瞬、ジャージの匂いを嗅ぎそうになったが…。」

「だって、怪しいんだもん!今も、一瞬、怪しい動きをしたし。」

そう言いながら、彼女は俺の横に座る。

(この行動は、俺ともう少し、話をしてくれるという意味だろうか?)

「あの一、名前…、聞いてもいいですか?この前…、聞くの忘れたから…。」

「あれ?私のこと、思い出してくれたんじゃないの?がっかり…。」

「すみません…。」

この二日間、記憶の糸を手繰り寄せ、彼女を思い出そうとしたが…。

中学の時、会ったことがあるような気もしたが、どうしても思い出せなかった。

「まあ、しょうがないか…。私も、中学の時とは違うから。」

「…?」

(どどいっことだ?)

「じゃあ、水野くんにヒントをあげよう！私が誰だか当てたら、いいことあるかもよ！」

そう言うと、彼女は鞆からメガネを取り出して掛ける。

そして、俺の方に向き直ると、肩まで伸びた黒髪を両手で掴み、おさげ髪を作って見せた。

「あっ！」

「おっ、思い出してくれたのかな？」

「コンタクトレンズにしたんですか？神崎先輩！」

「いわゆる、『高校デビュー』ってやつです…。」

そう言って、照れくさそうな笑みを浮かべる彼女。

(俺はバカなのか？彼女を忘れるなんて！)

(ずっと好きだったはずなのに…。)

俺は、ずっと憧れていた彼女に、告白しようとしたことすらある。

結局、実行に移すことは出来ず、その恋は終わりを告げた…、と思っていた。

中学時代の彼女は、有名人ってわけでもないが、一つ上の学年や俺達の学年、更に一つ下の学年の奴らは、顔と名前ぐらいは知っている。

何故なら、彼女は生徒会長だったからだ。

卒業式では、女の子ながら答辞を読んでいる。

俺は、そんな彼女のが好きだった。

初めて話した時からずっと…。

その時しか、話したことはなかったが…。

「全然、印象が違ったから、分かりませんでしたよ。」

（それにしても、変わり過ぎだろ！）

「真面目な生徒会長だった私だって、女子高生になれば、違う世界が見てみたくなるのよ！彼氏だって…、欲しいし…。」

「神崎先輩は、確かに真面目そうに見えましたけど、実際はそうでもない…、って聞きましたよ、先輩達から。」

「誰よ、そんなこと言ってた奴は！どうせ、バスケット部の高木くんあたりでしょ、そんなこと言ってたのは！」

「ち、違いますよ、高木先輩じゃないです!」

(本当は、大正解だったか…。)

「私のことは、『神崎』とか、『瑞希』でいいよ! 『神崎先輩』なんて、照れ臭いから。」

「じゃあ、瑞希さんに質問があるんですが…。」

「何?」

「何で俺の名前、知ってたんですか? 学年だって違うし、ほとんど面識なんてないのに。」

(一度だけ話したことはあるけど…。)

(彼女が覚えているか怪しいもんだし、あれは『会話』と呼べる代物だったかどうか…。)

「えーと、それは…。ほ、ほら、水野くんって背が高いし…、バスケット部も二年生からレギュラーだったから…、目立ってたし…。」

「ふーん。」

(何か動揺してないか? この人…。)

「そ、そうだ！水野くん、携帯電話、持ってる？」

「一応、持ってますけど？」

「連絡先…、教えてよ…。」

(それって…、俺が聞こうとしたことなんだけど…。)

「いい…ですよ…。ちょっと待ってて下さい。今、家から取ってきますから。」

「学校には、持って行かないの？」

「当たり前ですよ！『特別な理由が無い限り、携帯電話を学校に持って来ないように』っていう決まりを作ったのは、瑞希さん達じゃないですか！」

「まあ、そうだけど。私は持って行ってたよ。」

「はぁー？何ですか、それ！」

(この人って、こんなキャラだったのか？)

連絡先を交換した後も、俺達はしばらくの間、話をしていた。

大して内容もない話。

彼女の高校生活。

彼女が卒業した後の、うちの中学の様子等々。

『彼女はいるの?』とも聞かれたが、素直に『いない』と答えた。

彼女にも同じような質問をしたが、彼女も『いない』と答えた。

俺は、心底、ホツとした。

憧れだった人との会話は、胸が苦しくなった。

俺は、彼女をデートに誘い出す方法を考えながら、話をしていたが  
…。

「夏休み…、何処か遊びに行かない?」

「えっ!」

(それも、俺が聞こうとしてたことなんだけど…。)

「傘を貸してくれたお礼に、デートしてあげる!でも…、受験生だからダメ…かな?」

「一日ぐらいなら、大丈夫ですよ…。」

「ホントにー!じゃあ、何処に行こうか?」

( ) 『お礼』って言ってたくせに、瑞希さんの方が喜んでるような…。( )

「夏だから、プールとか…。」

「あーっ、またエッチな目付きしてるー?」

「えっ、し、してないですよー!」

「私、水野くんが期待してるような大きさはじゃないんだけど…。」

「だから、何のことを言ってるんですか、一体!」

( ) すぐ、そっち方面に持って行くこととするな、この人…。( )

「じゃあ、日にちが決まったら連絡してね。私は、水野くんに合わせてるから。」

この日も、俺に満面の笑顔を見せて、帰って行った瑞希さん。

終わったと思っていたものが、再燃してきた…。

( ) 上手く行き過ぎて、何かコエー! ( )

( ) やっぱり、女の子には優しくしておくもんだな。( )

自分の部屋で、塾の予定表と、にらめっこをしながら、顔がニヤけているのを自覚していた。

夕方になっても、一向に涼しくならない、夏休み直前。

俺は、彼女と、デートの約束をした。

## 第一章 【三】

時は更にさかのぼり、中学二年生の春。

俺は、友人達と廊下でふざけ合っていた。

だんだんとエスカレーターしていき、肉弾戦の様相を呈してくる。

ドン！

「きゃっ！」

エスカレーターし過ぎた。

俺は、廊下を歩いていた女の子にぶつかってしまつ。

しかも、上級生の女の子。

「すみません！大丈夫ですか？」

尻餅を付いていた女の子に謝りながら、慌てて手を差し出す。

「…！」

(やべえ、めっちゃ怒ってる、この人…。)

差し出した俺の手を無視し、立ち上がったその女の子は、顔を赤くして俺を睨んだ…、ように見えた…。

「け、ケガしませんでしたか？ホントに、すみません！」

「廊下でぶざけてたら危ないでしょ。みんなが通るんだから。小学生じゃあるまいし。」

(そんなに怒っているわけじゃないのか？)

淡々とした口調で、俺達を注意する、その彼女。

「はい…、すみませんでした…。」

友人も彼女に謝る。

「特に、背の高いキミ…！」

「…！」

(えっ、俺？)

「ただでさえ大きいんだから、か弱い女の子ならケガするよ！私だったから良かったもの…。」

「はあ…、気を付けます…。」

「分かればいいの…！」

そう言って、ニツコリと微笑んだ彼女。

その笑顔に、ドキツとした。

(自分も『か弱い女の子』じゃん…。)

(確かこの人、生徒会長だったような…。)

(…っていつか、このドキドキって何?)

(あの笑顔…、反則だろ…。)

(やべえ…、俺、ちょっとやべえ…。)

これが、俺と瑞希さんのファーストコンタクト。

そして、中学時代の唯一の会話。

俺は、メガネを掛けた、おさげ髪の彼女に恋をした…。

それ以来、学校では、毎日のように彼女を探す。

見つけることが出来た時は、飛び上がる程、嬉しかった。

(俺、ちょっとヤバくないか…。ストーカーみたいじゃん…。)

(彼は…、いないみたいだけど…。好きな人、いるのかなあ。)

そして、梅雨入り前のある日、ちょっとショックな光景を目にする。

バスケット部の先輩である高木さんと、瑞希さんが話をしている光景。

話しているだけなら、特に気にする必要はないのだが…。

俺が、ハートを打ち抜かれた笑顔で、話をしている光景だった…。

(もしかして、彼女は高木さんが好きなのか?)

(高木さんも、万更じゃないみたいだし…。)

自分の彼女でもないのに、わけの分からない嫉妬心がわいてきた。

「高木さんって…、生徒会長の神崎さんと、付き合ってたりするんですか?」

一応、確認してみる…。

確認してみるだけ…、のつもりだった。

「はあー?そんなわけねえだろ!同じクラスなだけだよ!」

「そっですか…。」

(良かった…。)

心底、ホツとした…。

これが、いけなかった。

「ほっほう、そういうことか…。お前、意外と渋い趣味してんな。」  
俺の気持ち、バレてしまった。

「だ、誰にも言わないで下さいよ…。」

「言うわけねえだろ！でも、お前、アイツと面識あるのか？」

「俺は、多少…。向こうは、知らないと思いますが…。」

「もしかして…、『アレ』はお前か？」

「『アレ』って？」

「ちょっと前に、『背の高い二年生に吹っ飛ばされた！』って、アイツが言ってたんだよ。」

「…！」

(『吹っ飛ばされた』って…。確かに、その通りだけど…。)

「そこで、お互いに、恋が芽生えちゃったんだな。」

「『お互い』じゃないですよ！俺の一方通行です…。」

「まあ、そう思つのは、お前の勝手だけだな。」

「高木さんって…、神崎さんとそういう話…、するんですか？」

「だから、お前が想像してるような仲じゃないって！他にも、アイツと仲がいい奴はいるし。」

「あの人…、モテるんですか？」

「イヤ、全然！真面目を絵に描いたような外見だしな。実際に話してみると、結構、天然で、面白い奴なんだけど。外見だけで惚れるのなんて、お前ぐらいだろ。」

（『外見だけ』というわけじゃないんだけど…。）

そして、彼女の卒業間近。

「お前、神崎に告らねえの？もうすぐ、卒業しちゃうぞ。」

受験が終わり、一段落ついた高木さんが、部活に顔を出し、俺に問

い掛けてきた。

「しませんよ…。」

（どうせ、上手くいくわけないし…。）

「向こうは、待ってるかも知れないぜ。」

「そんなわけないですよ!」

（でも…、言うだけ言ってみようかな…。）

「ところで、お前、高校は何処に行くの?」

「先輩と同じ、東高に行こうと思ってますけど。近いですから。」

東高なら、自転車で十分もかからない。

歩いてだって行ける。

「神崎は西高だぜ。」

「知ってますよ…。前に、先輩が俺に、言ったんじゃないですか!」

「神崎のケツは、追い掛けないのか?お前の成績なら、ちよっと頑張れば行けるだろ?」

「無理ですよ!それに、ちよっと遠いですから。」

西高だと、自転車で二十分はかかる。

「まあ、俺としては、高校でも、お前とバスケが出来るのは、いいことだけだな。お前がいれば、結構、いい線まで行けるだろうし。」

（うーん、そう言ってくれるのは、嬉しいけど…。）

（高校では、部活より他のことに、力を入れたいんだよな…。）

（例えば、恋愛とか…。って、なんてキモいことを考えているんだ、俺は！女子じゃあるまいし！）

結局、卒業式の日も、『告白』を実行に移すことは出来ず、彼女は卒業してしまった。

卒業式の後、一瞬、彼女と目が合った…、気がした…。

彼女は、悲しげな顔をした…、気がした…。

こうして、彼女は中学を卒業し、俺は中学三年生になった。

## 第一章 【四】

そして、中学三年の夏休み。

瑞希さんの初デート。

その日は、台風が近付いていて風が強かったが、真夏日を記録する程の暑さだった。

待ち合わせ場所は、俺のマンションの入口。

行き先は、市民プール。

本当は、もっと大きな所に行きたかったが、いかんせん、中学生にはこれが限界。

いつかのように、自転車に乗ってやって来た彼女の格好は、ヒラヒラミニスカートのワンピース。

むき出しになっている彼女の腕や足は、俺には刺激が強過ぎた。

（女の子の腕や足って、あんなに細かったっけ？）

（あんなヒラヒラのスカートじゃ、捲れちゃうかも知れないじゃん

！)

「今日は風が強いのに、そんな格好で大丈夫ですか？」

「もーっ、相変わらずエッチなことばかり考えてるんだから、この中学生男子は！」

「ハイハイ、すいませんでした。」

(この人は俺を、どうしても、『エッチな男子』にしたいらしいな  
…。)

いちいち反応するのも、馬鹿らしかった。

「あーっ、何か可愛くない反応！ご心配には及ばず、下に水着を着てるから大丈夫だよ。ほらっ！」

「んがっ！」

スカートを捲り上げる彼女。

変な声を出してしまった俺。

「『んがっ』だって！何て声、出してんのよ！」

どうやら、ツボに入ったみたいで、彼女はしばらく大笑いしていた。

プールに着くと、俺は先に着替え終わる。

俺は男だから、プールサイドで着替えたって問題はないぐらいだが、年頃の女の子はそうはいかない。

更衣室の近くで、彼女が出て来るのを待っている…。

「ごめん、お待たせ！」

「…!!!」

彼女の水着姿に、言葉を失う。

彼女の水着姿は、同級生の女子達のそれとはあまりに違っており、言葉が出て来ない。

スクール水着なわけではない、という想定だけはしていたが…。

大人の女性を思わせるその姿は、夢にまで出てきそうな光景だった。

「ちょっとー、私のこの格好を見て、何か言うことあるでしょ！」

「か、可愛い…です…。」

（想像以上に…。）

（それに、谷間がちゃんとあるじゃないですか！）

「ホントにー、ありがとう！でも、この谷間は偽物だけどね。寄せ  
て上げて、パットを詰めて、だから。」

「…。」

(余計なことは、言わなくていいのに…。)

「夜、私の水着姿を思い出して、一人をするの?」

「だ、だから、何を!」

(何てことを言うんだ、この人は!)

楽しい時間は、あっという間に過ぎ、そろそろ帰ろつという時間になる。

名残惜しかったが、人も少なくなってきたし、時間も時間だったから…。

「ねえ、ねえ、水野くん!あそこに何かあるよ!」

プールの中を指差す彼女。

「えー、どこですか?」

プールサイドにしゃがみ込み、水面を覗き込む。

トン！

「うわーっ！」

ドボン！

背中を押され、プールに落ちる。

不覚をとった…。

この人に、背中を見せるなんて…。

「ごめん、ごめん！あまりにも狙い通りの反応だったから、つい手が出ちゃった！」

そう言いながら、ゲラゲラ笑う彼女。

(まったく！この人は、大人なんだか、子供なんだか…。)

「危ないじゃないですか！」

「だから、ごめんって言ってるじゃん！はいっ！」

そう言って、手を差し出す彼女。

ドキツとして、一瞬、その手を取ること躊躇する。

そして、ドキドキに気付かれないように、彼女の手を取り…。

グイッと引つ張る。

「きゃっ！」

ドボン！

彼女もプールに落ちる。

(ざまあみる！仕返しだ！)

「ちょっとー、何すんのよー！子供みたいなことしないでよー！」

「どつちが子供だよ！」

憎まれ口を叩いたが、俺は彼女の手の感触を思い出していた。

初めて握った、女性の手…。

初めて握った、瑞希さんの手…。

改めて、彼女のことを好きだと自覚した。

「今日は楽しかった！また遊んでね！ってダメだよね…、受験生だもんね…。」

別れ際、彼女は悲しそうな顔をする。

『あの日』、見た顔だった。

「大丈夫ですよ、また遊んで下さい。…じゃなくて…」

「…?」

(何を言おうとしてるんだ俺は!)

「俺はまだ中学生だし…、受験生だし…、高校生の瑞希さんから見れば、子供に見えるかも知れないんだけど…」

「…?」

(やべえ、止まらない!)

「俺と…、付き合ってください!」

(言っちゃった…。どうしよう。)

「う…そ…。」

「嘘じゃないです!本気です!俺、瑞希さんが好きなんです!」

(『あの日』から、ずっと。)

「私なんかでいいの?それに…、水野くん、受験生だし…」

「問題はそこなんですけど…。毎日、会うのは、さすがに無理ですけど、出来るだけ時間は作りますから。」

「それじゃあ、一ヶ月に一回は、必ず会ってことまでどう？今日みたい長い時間じゃなくても、ほんの数分でもいいから。」

「瑞希さんが、それで良ければ…。」

「じゃあ、それで決まり！」

「えーと…、それで…、告白の返事は？」

「はあ？何を言ってるのよ！『はい』に決まってるじゃん！私で良ければ…。」

中学生最後の夏休み。

俺に初めての彼女が出来た。

偶然に、偶然を重ねて…。

## 第二章 【序】

（あの頃は、俺も若かったな…。）

中学時代を思い出し、苦笑いする。

今は、まだ二十代だが、妙にオッサンくさいことを思ってしまう。

（しかし、止まねえな、この雨…。）

（電話も掛かって来ねえし。）

（もう一回、掛けるべきか？）

ふと、横を見ると、同じ歳ぐらいの女性がいる。

その人も、俺と同じように、恨めしそうに空を見上げている。

（この人も、傘、ねえのか？）

OL風のその女性は、メガネを掛けており、茶色がかったショートカットの髪。

パンツスーツをビシッと着こなしている姿は、見るからに仕事が出来そうな感じ。

(結構、綺麗な人だなあ。)

その女性に、少しの間、見とれていると、不意に彼女がこちらを見る。

(やべえ！目が合っちゃった！)

「凄い雨…ですね。」

その女性が、俺に声を掛けてきた。

「そ、そうですね。今日、雨が降るって、言っていました。」

「ええ、言っていましたよ。」

(この人も、仕事帰りかな?)

「お姉さんも、傘、ないんですか？」

「はっ、えっ…、まあ…。」

「俺もです。迎えを呼ぼうとしたんですけど、電話に出てくれなくて。」

(でも、この人、雨が降るって知ってたんじゃないの?)

「家族の方？それとも、彼女…かな？」

「一応、俺の奥さんですけど…。」

「結婚…してるんですか？」

「ええ、まあ…。」

そのOLらしき女性は、一瞬、悲しそうな顔をした。

よく見ると、俺より少し、年上な気がするこの女性。

(結婚してないのかな、この人…。)

その女性の悲しそうな顔は、どこかで見た気もしたが…。

そういえば、あの頃のデートは、雨が降ることが多かった。

俺は、絶対に雨男じゃないが！

## 第二章 【一】

中学三年の夏休み明け。

俺と瑞希さんが、『彼氏』と『彼女』になってからの、記念すべき最初のデートの日。

「あーあ…、行きたかったなあ、遊園地…。」

「仕方ないですよ、こんな雨じゃ！」

大雨により、予定していた遊園地行きがダメになる。

仕方なく、ファミレスで雨宿りをしつつ、ご飯を食べている俺達。

（瑞希さんが、『遊園地に行きたかった』と言ったのは、これで何度目だ？）

「やっぱり、マサ君が雨男なんじゃないの？」

「絶対に違いますー！瑞希さんが雨女なんですー！」

（この会話も、一体、何度目だ？）

遊園地に行けなかったのは残念だったが、瑞希さんと話しているのは楽しかった。

時間を忘れてしまう程に…。

( 店員に、『あのカップル、ドリンクバーで、いつまで粘るんだ!』って、思われただろうな…。 )

「今年の夏の大会は、どうだったの?」

「何の?」

「『何の』って、バスケットの大会!マサ君、バスケ部でしょ?」

「あ、あ…。今年は、市の大会のベスト8で、負けちゃいました…。」

( もし、県大会まで行っていたら、瑞希さんには再会してないはずだけどね。 )

( あの、にわか雨の日は、普通に部活だったと思うから。 )

「凄いじゃん、ベスト8なんて!うちの中学の他の運動部なんて、初戦敗退ばかりでしょ?」

「凄くないですよ…。去年は市の大会では優勝して、県大会まで行きましたから…。」

「マサ君、去年の大会も大活躍だったもんね！」

「…？何だか、見てたような、口振りですけど？」

「…！えーと…、実は…、去年、こっそり見に行ってたの、バスケット部の試合…。」

「はあ？何で？」

「『何で』って…、応援に…。」

「生徒会長だったから？」

「違う…。マサ君の応援に…。」

「えっ…、どういふこと？」

「だからー、あの頃から、マサ君が好きだったから！」

「はいーっ？」

（あの頃って…。俺も、もう好きだったじゃん！瑞希さんが…。）

「もー、恥ずかしいこと言わせないでよ！罰として、マサ君も言いなさいよ！いつ、私のことが好きになったか！」

「『いつ』って…。」

（正直に言っべきか、否か…。）

「もしかして、雨に濡れて、下着が透けて見えてた私に惚れたとか？マサ君、エッチだからなあ。」

「違います！断じて、違います！」

「じゃあ、私の水着姿に惚れちゃったとか？」

「それも、違います！」

「じゃあ、いつよ？」

「えーと…、去年の春頃…、瑞希さんにぶつかった時…。一目惚れしました…。」

「やっぱり、マサ君も…。」

「『やっぱり』って…。」

（気付かれてたのー！）

（うわっ、めっちゃ恥ずかしい！）

（ん？『マサ君も』って言わなかった？）

「だって、最近、好きになったんじゃないかなければ、それ以外に考えられないもん！その時しか、接点がなかったからね、中学時代の私達。あの当時の私に一目惚れするなんて、変わってるね、マサ君。」

（自分で言うなよ…。）

「もう止めましょう、この話は！逃げ出したいくらい、恥ずかしいので…。」

「実は私も…、あの時、マサ君に一目惚れしたんだけど…。」

「はあー？だってあの時、めっちゃ怒ってたじゃん、瑞希さん！」

「怒ってないよ、めちゃくちゃ恥ずかしかったけど…。だってマサ君、もの凄く心配そうな顔で、当たり前のように、手を差し出すんだもん…。」

「…。」

(だって、女の子を吹っ飛ばしちゃったから…。)

「背が高くて、格好良くて、優しい王子様が現れた！…って思ったの。漫画みたいな展開って、ホントにあるんだ！…って思った。しかも、私に惚れてくれたみたいだし。」

(薄々、感じてはいたが、この人、ちょっとズレてる…。)

「一つ疑問点があるんですが…。」

「何？」

「あの時、俺が瑞希さんを好きになったのは確かですが、何でそれを瑞希さんが気付いたんですか？」

(毎日、目で追ってたのが、バレてたのか?)

「高木くんに聞いたから。」

「…!!」

(そっちか！口止めたのに！)

「背の高い二年生だったから、バスケット部かバレー部だと思って、バスケ部の高木くん聞いてみたら、ビンゴだったわけ。」

「じゃあ、瑞希さんは、俺達が両思いだったって、知ってたんですね…。」

「うん、知ってた。」

(何で、言ってくれないんだよ、高木さん！)

「何で…、告ってくれなかったんですか？」

「それはごつちのセリフ！高木くん、『告白しないのか？』って、言われたことなかった？」

「言われて…ました…。」

(あれは、そういう意味だったのか！)

「私が、高木くんをお願いしたの。マサ君が、私に告白するように、それとなく仕向けて欲しいって。だって、こういうことは、男の子がするものでしょ？」

「…。」

（瑞希さんから、言ってくれても…。イヤ、俺が言つべきだった…。）

「私…、ずっと待ってたのに…。卒業式の日まで…。」

「…。」

（瑞希さんは、俺のこと知らないって、思ってたから…。）

「マサ君が何も言ってくれなかったのは、私に魅力が足りないからだ…と…思…っ…て…。高校生になったら、変わってみようと思ったの…。」

「魅力が足りなかったわけじゃ…。」

（当時の瑞希さんでも、俺的には、充分、魅力的だったわけ…。）

（俺が、ヘタレだっただけで…。）

「でも、もういいの！今は、マサ君と付き合うことが出来たから！初恋の…。」

「初恋…、だっただんですか？」

「それまでも、何となくいいなって思った人はいたけど…。この人が好きって思った人は、マサ君が初めて。だから、有り難く思いなさいよ！」

「はあ…。」

(何が、有り難いんだか…。)

俺達は、どれくらいファミレスで粘ったんだっけ？

その日は、雨が小降りになった夕方頃に帰った。

当然、『彼氏』としては、『彼女』を家まで送って行く。

この時、二人とも傘をさしており、微妙な距離が空く。

俺は、手を繋ぎたかったが、この状態では無理だった。

並んで歩く俺達の会話は、一向に途切れない。

(それにしても、瑞希さん、よく喋るな。それに、よく笑う…。)

(第一印象とは、だいぶ違うけど、こっちの瑞希さんの方が好きだな…。)

「遊園地は残念だったけど、今日は楽しかった！マサ君のことも、たくさん分かったし。」

「俺もです!」

彼女も、俺と同じ気持ちで、何だかホッとした。

「来月は、何しよっか?」

「えーと…、来月は…。」

( ちょっと言いづらいな )

「遊園地にリベンジする?」

「えーと…、来月からは、休みの日も塾があつて…。」

「そ、そっか…。仕方ないよ…、受験生だもん…。」

傘で顔は見えなかったが、声のトーンで、がっかりしているのが伝わってくる。

「すみません…。」

謝ることしか出来ない。

「謝る必要、ないって! そういう約束だし…。それじゃあ、来月は、『放課後デート』だね。それはそれで楽しみ!」

「…。」

彼女は、無理やり明るい声を出しているように聞こえた。

今にして思えば、『放課後デート』なら、月一回じゃなくても良かったのだが、俺達は、律儀にその約束を守っていた。

「マサ君、携帯はまだ学校に持って行ってないの？」

「持って行ってませんけど？」

「持って行きなよ！」

「だからそれは、瑞希さん達が…。」

(瑞希さんが生徒会長だった時に、決めたルールだろ！)

「見つからなければ大丈夫だよ。多分、女の子達は、内緒で持って行ってる子が多いと思うよ。」

「でも、先生に見つかったら、取り上げられますよ。」

「生活指導の先生じゃなければ、取り上げられないよ。注意はされるかも知れないけど。」

「何で、そう言い切れるんですか？」

「だって私が、先生達に根回ししたから。」

「はあ？」

「そもそも、あのルールは、生活指導の先生に、無理やり押し付け

られたものだし。先生達の中には、『禁止にしくなくても』っていう人も、沢山いたよ。」

「…。」

（この人は、凄いんだか、凄くないんだか…。）

「だから、こっそり持って行っちゃいなよ。」

「でも…。」

「そうすれば、学校にいる間も、メールとか出来るし…。」

「うん…。」

（ホントに、いいのかな…。）

最初は、どうなることかと思ったデートは、総合的には楽しかったと言っている。

恐らく、彼女も同じだったはず。

帰り道での、彼女の淋しそうな様子が、気にはなったが…。

## 第二章 【二】

中学三年の秋。

十月の『放課後デート』は、やっぱり雨だった。

『雨男』『雨女』のくだりは、この日も、二人の間でなされた憶えがある…。

俺の家のマンションの入口で、取り留めの無い会話をするだけのデート。

俺は、それだけで充分、楽しかったが、彼女はとうだったか…。

そして、十一月のデート。

天気は曇り。

その日、ちょっとした騒動が巻き起こる。

帰りのHRが終わり、急いで帰る支度をしていると、妙に廊下が騒がしい。

一足先に、HRが終わったクラスの生徒が騒いでいた。

「高校生が、校門の所にいるらしいぜ！」

(ん?)

「男?女?」

「女子高生!しかも、ちょっと可愛いらしい!」

「うっそ、マジー!」

色目き立つ、中学生男子。

(まさか…。イヤイヤ、そんなはずは…。)

「こっそり、見に行こうぜ!」

嫌な予感がした。

俺は慌てて教室を飛び出し、いつものトイレに駆け込む。

瑞希さんからのメールに、返信をしている場所。

ほとんど、人が来ないこの場所。

携帯を取り出し、電話を掛ける。

『もしもし、マサ君？学校、終わったの？』

『瑞希さん、今、何処にいます？』

『今ねー、マサ君の中学の校門前！』

やっぱり！

『何でそこにいるんですか！』

『マサ君に、早く会いたかったから来ちゃった！手を振ったら、マサ君に見えるかな？』

『だー！振らなくていいですから、今すぐ、そこから移動して下さいー！』

『何処に？』

『学校の裏に、公園がありますよね？その、屋根がついているベンチの所で、待って下さい。そこなら、人通りが少ないですから。』

『そこで、私を押し倒すの？もー、エッチなんだから！』

『だから、そんなこと、しませんよ！いいから、早く移動して下さい！』

『はい！早く来てね！』

(何を考えているんだよ、この人は…。)

「あつ、来た、来た！マサクーん！」

無邪気な笑顔で、手を振る彼女。

(この天然女め！)

「学校、終わるの早かったですか？」

「ううん。マサ君に早く会いたかったから、早退して来た。」

「そんなことしちゃ、ダメじゃないですか！」

「だって…。」

「…。」

(気持ちは分かるけど…。)

この頃の俺達は、一ヶ月という期間が、ちょうど良かったのかも知れない。

微妙に間が空くことにより、『会いたい』という気持ちだが、より強くなるから…。

「マサ君、バスケットで推薦の話とか、来てないの？バスケット上手いの。」

「市外の私立から、一つありましたけど、断りました。寮に入らないといけないから。」

「もしかして、私に会えなくなるから？もー、照れちゃうなあ！」

「ハイハイ、その通り、その通り。」

「また可愛くない反応だ！でも、上手いのに、勿体くない？」

「もう、バスケットはいいんです。これからは、趣味程度で充分です。」

（瑞希さんと、会う時間も減るし…。）

「成績…、落ちたりしてない？」

「それは、大丈夫です。むしろ、上がってますから。塾で、『この成績なら、西高に行けるぞ』って、言われました。」

「ホントにー！そしたら、一緒の高校に行けるね！」

「うーん…。でも、俺は東高でいいですよ。近いし、知ってる奴等も、いっぱい行きますから。」

「何ですよ…。私、マサ君と一緒に、学校に行きたいのに…。」

「別に、学校が違ってても、大丈夫ですよ。現に、今だってそうだし、受験が終われば、会う時間も増えると思うし。」

「そうだけど…。」

（何を心配してるんだらう？）

（俺は瑞希さんが好きだし、瑞希さんも俺が好きだから、大した問題じゃないだろ？）

彼女が何故、悲しそうな顔をしたのか、俺には分からなかった。

この日も、並んで歩きながら、瑞希さんの家まで帰る。

この時の彼女は、少し元気がなかった…。ように見えた…。

彼女は、自転車を押しながら歩く。

またしても、手は繋げない。

付き合い始めて三ヶ月が経つが、未だに手も繋げない俺達。

行き場を無くした俺の手は、ズボンのポケットに突っ込まれたまま

だった。

(何で上手く行かないんだろう?)

(手を繋ぐことなんて、簡単なはずなのに…。)

「来月のクリスマス…、空いてる?」

恐る恐る、彼女が聞いてくる。

「二十四日と、二十五日は塾です…。残念ながら。」

「そうなんだ…。…塾…。サボってよ…。」

「えっ、ちょっと…。それは…。」

(出来ない相談なんだけど…。)

「冗談だよ!二十四日の夜か、その前後の日は?」

「二十四日の夜は、空いてますよ。二十六日なら、一日中、空いてますけど。」

「じゃあ、来月は二十六日にしよう!久しぶりに、一日デートして、カップルらしく、プレゼント交換しようよ!」

「いいですよ。瑞希さんは、何が欲しいですか?」

「教えてあげない。マサ君、自分で考えなよ！私が喜びそうなものを、私のことを考えながら！」

「ちょっとぐらい、ヒントをくれても…。」

(女の子が喜びそうなものなんて、分からないし…。)

「ダメだよ！恋人のことを考えながら、プレゼントを選ぶことが重要なんだから！」

「じゃあ、俺も教えませんかね！」

「大丈夫だよ。私は、大体、決まってるし！」

「何…ですか？」

「だから、内緒！」

このやりとりで、瑞希さんは少し元気になったようで、俺はホッとした。

次の日。

「ねえ、ねえ、聞いた？昨日の女子高生、去年、うちの生徒会長だった神崎先輩だったんだって！」

瑞希さんは、中学生女子の噂の的だった。

「うっそー！神崎先輩って、もっと地味な人じゃなかった？昨日の女子高生、凄く可愛かったよ。」

「うちの中学に、『彼氏』がいるらしいよ！その『彼氏』のおかげで、可愛くなっただんじゃない？」

「私も『彼氏』が出来れば、可愛くなれるのかなあ！高校生になれば、『彼氏』出来るのかなあ！」

「それより、神崎先輩の『彼氏』って誰だろう？」

「多分、バスケット部の誰かだよ！去年、そんな噂があったじゃん！」

「でも、その噂は、『彼氏』じゃないって話だったでしょ？」

（そんな噂があったのか…。全然、知らなかった…。）

（もしかして俺は、『フラグ』ってやつに、ことごとく、気付かなかったのか？）

自分の、『恋愛偏差値』の低さを自覚した、中学三年生の秋。

でも、普通の中学生って、こんなままでしょ？

## 第二章 【三】

中学三年の十二月。

日曜日の、この日。

ショッピングセンターの、アクセサリー売場に、場違いな男が一人。

クリスマスが近いこともあり、周りはカップルだらけ。

無難にアクセサリーはどうかと、思ったのだが…。

(塾帰りの中学生が来る場所じゃねえな…。)

(それにしても、一体、何を贈ればいいんだろう?)

「彼女にプレゼントですか？」

「ええ、まあ…。」

場違いな男だから目立ってしまったのか、綺麗な女性店員に声を掛けられる。

「高校生だよな？これなんかどう？」

（『彼女』は高校生ですが、俺は中学生です…。）

「あんまり高い物は、無理なんです…」

「これは高くないよ。『バレッタ』って言って、ヘアピンみたいなものだけ。」

（うーん、店員さんが褒めてくれるし…。）

（じついつの、瑞希さん、似合うかも。）

（この値段なら買えるし。）

「これにします…！」

「ありがとうございます。プレゼント用でいいんだよね？」

「はい、お願いします。」

（こんなんで、喜んでくれるかな、瑞希さん…。）

商品を受け取ると、急に不安に襲われた。

人生初の、女性へのプレゼントは、三千円ぐらいの、安物だった。

そして、当日。

冷たい北風は吹いていたが、天気は快晴。

俺達はまず、ファミレスに入り、プレゼントを交換しあう。

「開けてもいい？」

「どうぞ。安物だから、期待しないで下さい…。」

目を輝かせながら、プレゼントの包みを開ける瑞希さん。

「わぁー、可愛いー！ありがとう！付けてみてもいい？」

「どうぞ。」

想像以上に喜んでくれて、ホッとした。

「似合う？」

「は、はい、想像以上に…。」

( ) やべえ、めっちゃくちゃ可愛く見える…。

「『想像以上』って、どういことよ！」

「あつ、いや、深い意味はなくて…。」

俺の余計な一言に、拗ねる瑞希さん。

その表情が、更に可愛く見えた。

「どうしよう、嬉し過ぎて、涙が出そう!」

「そんな大袈裟な…。」

「だって、ホントに嬉しいんだもん!これを買うの、恥ずかしくなかった?」

「まあ…、少し…。」

苦い思い出がよみがえってきたが、

「そういうところも含めて、凄く嬉しい!」

彼女の満面の笑顔で吹き飛んだ。

「俺のも、開けていいですか?」

「どうぞ、どうぞ!っていうか、早く開けて欲しい!」

この時も、目を輝かせる彼女。

「あつ、手袋だ。」

「手編みじゃないけど…。マサ君、この前、ポケットに手を入れて寒そうだったから。手袋があれば、手だって繋げるし…。」

そう言っつて、顔を赤らめる彼女。

「ありがとうございます。」

「私も、色違いのサイズ違いを買ったから、お揃いだよ！手編みの物は、また、別の機会ってこと…。」

（ポケットに手を入れてたのは、別の理由からだけど、それは黙っておこう。）

（しかし、見てないようで、良く見てるなあ、この人。ちょっとズレてるけど…。）

その後、またもや俺達は、ファミレスで数時間、粘る。

せつかくの機会だから、手を繋いで、色々な所へ行きたかったが…。月の小遣いの半分が、プレゼント代に消えてしまい、俺はお金が無かった。

（高校、入ったら、バイトするかな。）

つくづく、そう思った。

帰りは、いつものように並んで歩き、話しながら帰る。

しかし、いつもとは少し違う。

それは、手袋をした二人の手が、しっかりと繋がれていたことだった。

「マサ君、いつまで私に敬語で話すの？」

「『いつまで』って…。一応、先輩ですから…。」

「私は、マサ君の何？」

「『彼女』…、ですけど…。」

「じゃあ、マサ君は、私の何？」

「『彼氏』…、ですけど…。」

「それなら、敬語はいらなくない？あと、『さん』もいらさない。私のこと、『瑞希』って、呼んで欲しいなあ。」

「急には無理だ…すよー!」

「急じゃないよ。だって、付き合い始めてから、四ヶ月も経つし。」

「もっと長い期間、付き合い合ってれば、自然に呼べるようになりますよ。」

「『長い期間』って、どれくらい？」

「そんなの分かりませんよ。」

俺達の場合、付き合い始めて四ヶ月ということは、まだ四回しか会っていないことを意味する。

その前を合わせたって、まだ七回。

中学時代の出会いの場面は、数に入れるべきではないだろう。

俺は、この日になってようやく、瑞希さんが『俺の彼女』なんだと実感したぐらいだったから。

「マサ君、まつ毛にゴミが付いてるよ。」

家の前で彼女が、淡々とした口調で指摘する。

「別にいいですよ。」

そう言って、自分でゴミを取ろうとする。

「まだ、取れてないよ。私が取ってあげるから、少しかがんで、目

を閉じて。」

言われた通りに、目を閉じる。

そして…。

チュツ！

「…！！！！！！」

俺の唇に、彼女の唇が触れる感触に驚いて、目を開ける。

「マサ君、また騙されてるー！ホント、素直なんだから！」

顔を真っ赤にした彼女が、笑いながら憎まれ口を叩く。

「…。」

俺は、言葉が出て来ない。

俺と瑞希さんは、初めてキスをした。

俺は勿論、初めてのキス。

恐らく、彼女も…。

「私の家に、ちょっと上がってく？今日、夜まで誰もいないから。」

まだ、心此処に有らず状態の俺に、追い打ちをかける彼女。

「き、今日は、え、遠慮しときます…。」

どもりながら、やっとの思いで返事をする。

「そっ…。意気地なし…。」

「えっ？」

「うっん、何でもない！じゃあ、それはまた今度ね！それから、今日の夜は、私の唇の感触を思い出しながら、するんだよ！」

彼女の言葉の意味がわからず、

「何を？」

と聞き返す。

彼女は、俺のその質問には答えず、背を向ける瞬間、クスッと笑った。

俺は帰り道で、彼女の言葉の意味を理解し、頭を抱えた。

この日の夜、俺は中々寝付くことが出来なかった。



## 第二章 【四】

年が開け、高校受験が目前に迫って来る。

一月二日、瑞希さんと初詣に出掛ける。

彼女は、晴れ着姿ではなかったが、俺のクリスマスプレゼントは付けていた。

俺の願いは、勿論、合格祈願。

彼女の願いは…、聞いても教えてくれなかった。

二月のデートは、十四日。

その日は塾が有り、放課後、数分しか一緒にいられなかった。

「手作りチョコだから、感謝するように。」

いつもの調子で、そう言い残した彼女。

帰り際、頬っぺたに、チュッとされた。

出来れば、口が良かったのだが…。

中学三年の三学期は、本当に慌ただしく過ぎて行き、俺は、無事、東高に合格した。

卒業式を終え、春休みを迎えた初日。

その日は、小春日和のいい天気だった。

俺は、瑞希さんの家に呼ばれた。

『高校合格のお祝いをしてあげる』と、言っていたが…。

「あれ？家の人は、誰もいないんですか？」

一応、手土産を持って行ったが、彼女の家には、彼女しかいない。

ちょっと、ホッとしたが…。

「両親は共働きだから、夜まで誰も帰って来ないよ。」

事もなげに言う彼女。

付き合い始めて半年が過ぎていたが、始めて知ったことだった。

「そ、そうなん…ですか…。俺の家と一緒に…ですね…。」

(オイオイ…、いいのかよ…。二人きりってことだろ?)

この日、彼女が作ったお昼ご飯を、一緒に食べた。

めちやくちや嬉しかったし、美味しかった。

料理を用意する彼女の姿に、改めて、惚れ直した。

「こんなにお祝いしてもらって、良かったのかな？俺も、何かお返ししないとイケないですね。」

「これも、お祝いの一部だけど、これだけじゃないよ。」

淡々とした口調の彼女。

「…?」

(彼女も緊張してるのか?)

(そりゃ、異性と二人きりで家にいれば、緊張もするよな。)

彼女は緊張していると、感情を表に出さないように、あえて淡々とした口調で話す。

必ずってわけじゃないけど、緊張の度合いが高い時ほど、その傾向が強い。

『あの時』も…、『あの時』も…、そうだった。

(俺も、段々、彼女のことになってきたぞ。)

(それより、他のお祝いつて何だろう?)

(プレゼントでもくれるのか?)

「食事の片付けしちゃうから、先に私の部屋に行つて。」

「えっ…、いいの?」

「別に大丈夫だよ。でも、あんまり部屋の中、漁らないでよ。」

「う、うん。」

(ちょっと、おかしい…。いつものように、下ネタが混じってこない…。)

(いつもなら、『ダンスの中の下着を漁らないでよ』ぐらい、言っ  
てきそうなものなんだが…。)

）怒ってるわけじゃ、無さそうだけど…。）

瑞希さんに案内され、初めて女の子の部屋に入る。

中は、ごく普通の女の子の部屋だった。

ベットの横には、ぬいぐるみ。

本棚には、少女漫画と恋愛小説らしきもの。

机の横には、女性向けのファッション雑誌が積まれていた。

俺は、慣れない場所で、やることもなく、手持ちぶさたで、ポーンと部屋を眺めていた。

「お待たせ。」

しばらくすると、彼女が部屋に入って来る。

やっぱり、どこか様子が変だった。

「それで、手料理以外のお祝いって何ですか？」

「えーと…、それは…、その…、何て言うか…、…、…たし。」

「えっ、何？」

こんなに、歯切れが悪い彼女は初めてだ。

「だから…、…私…。」

「ん？」

「だから…、合格祝いに、私をあげるの！」

「言っている意味が…。」

「マサ君が私にしたいことを、してもいいって言ってるの！」

「…！キス…してもいいってことですか？」

「それだけでいいの？」

「あ、え、は、はいっ？！…！！！」

何が言いたいのか、ようやく分かった。

彼女が、何故、緊張してるのかも…。

(それにしても、ズレているにも程がある！)

「私…、マサ君を喜ばすにはどうしたらいいか、色々考えたんだけど…。これが一番、喜ぶんじゃないかと…。ちゃんと、覚悟は決めたつもりだったけど…、いざとなったら緊張するね…。」

「そ、そんな…、無理しなくても…。」

正直、俺はビビってしまった。

「無理はしてない！マサ君は、私のこと、好きなんでしょ？」

「それは、勿論…。」

「男の子は、好きな娘には、そういうこと…、したいんでしょう？」

「確かに、そうですね…。」

(何回か、想像したこともあるけど…。)

「じゃあ、大丈夫。」

(だから、何が『大丈夫』なんだよ！)

「でも…、こういうことは、よく考えた方が…。」

「もーっ、私がいって言うてるんだから、いいの！ごちゃごちゃ言ってる、決心が鈍るでしょ！」

そう言い放つと、彼女は俺に抱きついてきた。

そして、唇を重ねて来る。

クリスマスの時よりも、長くて深いキスだった。

俺は思考が停止し、理性が飛んでしまった…。

持てる知識を総動員した初めてのセックスは、上手く出来たかどうか…。

正直な話、よく覚えていない。

覚えていることと言えば、女の子の体は、想像以上に柔らかく、想像以上に温かかいということだけだった。

「すっつごい、痛かったけど、今は、すっつごく、幸せだよ、私！」

「すみませんでした…。」

「何を謝ってるの？」

「何となく…。」

何故か、彼女に謝ってしまった。

その後、春休みの間、二人でいっぱい遊んだ。

行き損ねたままだった、遊園地にも行った。

映画を見たり、街をぶらついたりもした。

彼女を、俺の家に招き入れたりもした。

俺の部屋でイチャついていると、理性が飛んでしまい、彼女を押し倒そうとした。

この時は、彼女におもいきりひっぱたかれ、我に返った…。

「『あの時』は、特別だったの！だから、当分の間は、そういうこととはしない！」

「すみません…。」

やっても、やらなくても、結局、謝る羽目になった…。

（『当分の間』って、どれくらいだろう？）

盛りのついたオスは、救いようがない…。

こうして、俺は中学を卒業し、高校生になった。

彼女との付き合いは、順風満帆に見えていた。

### 第三章 【序】

……、また、電話に出ない。

（何やってるんだ、一体！）

（もしかして、何かあったのか？）

（一人だけの体じゃないのに！）

一瞬、嫌な予感が頭をよぎる。

「奥さん、電話に出ないの？」

例のOLさんが、また話し掛けてきた。

「そうなんですよ。何やってんですかね。」

「もしかして、浮気してたりして！」

「はあー？そ、そんなはずは……。結婚して、まだ一ヶ月だし、妊娠中だし……。」

「ふふつ……。冗談だよ……。あれ？奥さん、妊娠何カ月？」

べつやら、気付かれたようだ。

「えーと……。六ヶ月……。」「

動揺して、余計なことを言ってしまったばかりに…。

「計算、合わないよね？」

「お察しの通りです…。」

（お恥ずかしい限りで…。）

（でも今は、そんなに珍しいことじゃないでしょ？）

「奥さんとは、何処で知り合ったの？」

気が付くと、彼女は友達と話すかのように、話し掛けてくる。

「会社の先輩だったというか、俺の教育係だったというか…。」

素直に答える必要はないのだが、彼女の質問に、正直に答えてしま  
う。

「奥さんの方が、年上なんだね。」

「三歳ほど、年上です。」

「相変わらず、年上にモテるんだね…。」

俺は、どういうわけか、年上にはモテる。

今まで、付き合った女性は、全て年上。

片手で数えて余るぐらいしか、付き合ったことはないが…。

「あれ？今、『相変わらず』って、言いませんでした？」

（どういうことだ？俺のこと、知ってるのか？）

「言っていないよ…。」

（俺の聞き間違いか？）

### 第三章 【一】

高校の入学式の日、桜を散らしそうな雨だった。

この日も、瑞希さんに会う約束をしていた。

受験は終わったのだから、月一回である必要はない。

毎日でも会いたいくらいだった。

しかし、その日、帰ろうとすると、下駄箱の所に、背の高い上級生の男を見つける。

（やべえ！見つからないように、こっそり行こう…。）

俺は、この人を知っていた。

俺は、この人が嫌いではなく、むしろ、尊敬していると言っている。

ただ、今は会いたくない理由があった。

何とかやり過ごせたと思った瞬間、

「みーずーのーくん！一年経ったら、お世話になった先輩の顔を、忘れちゃったのかな？冷たい奴だなあー。」

見つかってしまった。

「ど、どうも…。お久し振りです、高木さん…。」

「お前、バスケット部に入るだろ？みんなに紹介するから来いよ。」

「あつ、いや、その…。」

肩を掴まれ、有無を言わず、体育館に連れて行かれてしまう。

（今日は大事な約束が！）

そんな言い訳が、通用するはずはないが…。

「コイツが、噂の新人で、水野正宏。今年のドラフト一位。」

俺をバスケット部員達に紹介する高木さん。

「そんな大袈裟な…。俺なんか、平凡な奴ですよ。」

バスケット部に入るにしても、過大評価は非常に困る。

「またまた、ご謙遜を！ここにいる奴ら全員、お前のこと知ってたぜ！よつ、有名人！」

部員の中には、同じ中学の先輩もいた。

実際に、対戦したことがある気がする人もいた。

「しばらく、ボールに触ってなかったんで、期待ハズレになると思っんですけど…。」

(何とか、切り抜けられないだろうか？)

「何だよ、お前！女のケツばかり追い掛けてたのか？図体はデカくても、ヘタレで童貞のくせに！」

(前言撤回！俺は高木さんは尊敬していない！)

(むしろ、ちょっとした恨みさえある。それを確信した！)

(それから、訂正したいところがある！ヘタレなのは認めるが、童貞では…。)

高木さんの発言で、部員全員に笑われてしまった。

しかも、可愛い女子マネージャーにまで…。

この日は、何とか切り抜けられたが、バスケット部入りは断れそうもなかった…。

この日、瑞希さんとはファーストフード店で待ち合わせをしていた。メールで、少し遅くなる旨は伝えたが…。

その店に入ると、すぐに彼女を見つけることは出来た。

俺のクリスマスプレゼントは、この日も、彼女は付けていた。

彼女は窓際の席で、不機嫌そうに、雨が降り続く窓の外を眺めていた。

「すみません、遅くなって!」

「遅いよ、雨男!」

俺に気付いた彼女は、笑顔を見せる。

その笑顔は、いつもと変わりがないように見える。

『雨男』と言われた件に関しては否定せず、聞き流しておいた。

俺は彼女に、遅れた理由と、バスケットに入らざるを得ないことを伝えた。

特に表情を変えるわけではなく、黙って聞いていた彼女だったが…。

「つまり、今日、遅くなったのは、高木くんに捕まったからだ。」

「はい、そうです…。」

「それでマサ君は、可愛いマネージャーに惹かれて、バスケット部に入ることにしたというわけなんだね。」

「えーと、一つ訂正したいことが…。可愛いマネージャーに惹かれたわけではなく、高木さんが強引だったから…です…。」

(やっぱり、少し怒ってるのか?)

「似たようなもんだよ…。」

(イヤイヤ、全然、違うだろ!)

「瑞希さん…、怒ってます?」

「怒ってないよ。マサ君は、バスケットを続けるべきだとは、思ってたから…。」

彼女は、何とも言えない、複雑な表情を見せた。

悲しそうではなく、勿論、嬉しそうでもない表情だった。

「高校生になれば、瑞希さんと、たくさん遊べると思ってたんですが…。」

「気にしないでいいよ……。こうなることは、何となく予想出来てたし……。」

「でも、あんまり会えないわけだし……。」

「最初の約束……。『月一回は必ず会う』っていう約束……。守ってくればいい……。よ……。」

「勿論です！一回と言わず二回でも三回でも！」

「浮気したら……。許さないからね……。」

「するわけないですよ！俺は瑞希さんが大好きだし。それに、俺はモテませんから。」

「マサ君、自分自身のことは、よく分かっていないんだね。」

「どっという意味ですか？」

「マサ君は、実は凄くモテるってこと！」

「そんなはず不是吗！告白とかされたことないですし。」

「それは、マサ君が鈍感なだけ。マサ君を見ている女の子の視線に、気付いていないだけ。私、『マサ君が好き』って言ってた娘、何人か知ってるよ……。中学時代の私の視線にも、気付かなかったでしょ？」

「……。」「」

( 中学時代、彼女も俺を見てたってことか？ )

「でも、今更、そういう視線に敏感になられても困るけどね。マサ君には、私だけを見ていて欲しいから…。」

「それは大丈夫です！これから、瑞希さんだけを見てますから！」

「ふふっ、ありがとう！そういうえば、さっき、聞き流しちゃったけど、マサ君、私のことはどう思ってるんだっけ？」

いたずらっぽい笑みの彼女。

ようやく、いつもの瑞希さんっぽくなってきた。

「大好き…です…。」

「ふふっ、私も！」

笑顔の彼女は、やっぱり可愛い！

彼女は、中学時代よりも大人っぽくなったが、その笑顔は、中学時代と何ら変わりがなかった。

「今日、これからどうしましょうか？俺、あんまりお金ないんですけど。」

春休み、瑞希さんと遊び過ぎて、小遣いは底を尽きそうだった。

(バイトは出来そうもないし、小遣いの値上げ交渉をしないと…。)

「うーん、雨だからね…。…私の家…。来る？」

「えーと…。行きたいのは山々なんですが…。理性が飛んでしまいそう…。」

「いいよ…。飛んでも…。」

「ホントですかー！」

「あーっ、やっぱりマサ君、エッチだー！」

「すみません…。調子に乗りました…。なるべく理性を保てるよう、努力します…。」

結局、彼女の家で、理性を保つことは出来ず、俺達は二度目のセックスをした。

この日、彼女は拒まなかった。

図らずも、月一回のデートを続けることになった俺達。

少しずつ、何かが変わっていることにも気が付かずに…。

### 第三章 【二】

高校一年生の春。

また、バスケット漬けの毎日が始まった。

俺が、バスケットは中学で卒業しようと思っていたのは、自分の限界を感じたからだ。

それまでは、バスケットで上を目指す気満々だった。

中学一年生の秋からレギュラーに選ばれ、俺は、結構やれる奴だと思っていた。

上級生に混じって試合をしても、引けを取ることはなく、中学二年の夏は、県大会まで行けた。

しかし、チームを引っ張る立場になると、自分の実力は、先輩達のフォーロワーの上に成り立つ、見せかけの実力だったことに気付く。

自信を失ったまま挑んだ中学最後の大会は、市の大会のベスト4をかけた試合で、大差で負けてしまう。

自分が引っ張らなければいけない立場なのに、逆に足を引っ張って

しまった。

試合後、悔しいはずなのに涙も出て来ない。

俺のバスケットに対する思いは、こんなものだったんだと思い、苦笑いするしかなかった。

東高校バスケット部は、三年生が四人、二年生も四人、女子マネージャーは二人。

人数は多くないが、みんな真剣で、バスケットが好きだった。

一年生は、仮入部には十人以上いたが、実際に入部したのは四人だけで、女子マネージャーはゼロ。

マネージャーは、隔年で募集するみたいだった。

「まあ、今年も例年通りだったな。」

先輩達は、新入部員が少ないことを、気にしていないようだった。

体育会系高校生の最大の目標は、インターハイ出場だが、当面の目標は、西高との定期戦での勝利。

毎年、六月の文化祭の日に、どちらかの学校で、定期戦は行われる。今年の会場は、西高の体育館。

東高も西高も、同じ日に文化祭が行われる為、俺的にはラッキーだった。

瑞希さんの前で試合が出来るから…。

彼女の前で、いいところを見せたい！

が、しかし、すぐに現実を思い知らされる。

半年以上のブランクは、あまりに大きかった。

技術的な勘は、すぐに取り戻せたが、いかんせん、体力が追い付かない。

(何とかしないと、瑞希さんに、いいところを見せられねえ…。)

俺は、体力作りに励む必要性に迫られ、居残り練習をしたり、早起きして家の近所を走ったりした。

やると決めたら、とことんやらないと気が済まない性格だから仕方がない。

俺と瑞希さんかというと、相変わらず、月一回のデートを続けていた。

しかし、受験生だった時よりも、時間を作るのが、更に難しい。

平日は毎日、遅くまで部活。

土日も、練習や練習試合。

休みは、月に一回しかない。

俺達は、その日に合わせて、デートをするしかなかった。

体力不足の俺は、瑞希さんを押し倒す気力もなかった…。

五月のデートは、彼女と映画を見に行ったが…。

「もーっ、信じらんない！マサ君、ずっと寝てるんだもん！」

「すみません…。」

（俺…、デートの度に謝ってないか？）

映画の後に行ったファーストフード店で、瑞希さんに怒られている俺。

彼女が見たいと言っていた映画の途中で、睡魔に負けてしまった。

ラブストーリーだったはずだが、内容はほとんど記憶にない。

「学校、大変なの？」

「学校というより、部活が大変で…。」

「何で？マサ君なら、すぐにレギュラーになれるでしょ？」

（余計なプレッシャーを掛けないで欲しいんだけど…。）

「半年以上もやってなかったから、体力不足で…。」

「じゃあ、余計なことに体力を使えないね！」

「そうですね…。」

（また、そっち方面かよ…。）

「ちょっとー、今は、ツッコむか、いつもみたいに慌てるか、どつちかしてよ！」

そんな彼女の言葉も、スルーしてしまった。

「文化祭の日、西高に行きますから。」

「聞いたよ！定期戦やるんだって？応援しに行っても…いい？」

「いいですけど…。でも、他校の応援なんかしてもいいんですか？それに俺は、試合には出られないかも知れませんよ…。とても、中学時代のようにはいきませんし…。」

「マサ君なら大丈夫だよ！まだ一ヶ月あるし。」

「まあ、そうですね…。」

彼女に励まされると、何とかかなりそんな気がしてきた。

男とは、単純な生き物だ。

好きな女の子に応援されると、俄然、やる気が出てくる。

(彼女は、俺の女神だな…。)

「今日、これからどうする？また、私の家に来る？」

彼女の両親は、土日祝日、関係なく、仕事に行くらしいが…。

「うーん…。今日は止めておきます…。」

「今日は、押し倒す気力もなし…か…。」

「毎回、毎回、押し倒しませんよ！発情期のオスじゃないんですか  
」

「やっぱり、マサ君はそういう反応をしてくれなくちゃ！素直で可愛いんだから！」

「…。」

(この人の趣味みたいなもんだな…。俺をからかって、楽しむのは…。)

(そういえば、俺、一度も瑞希さんの両親に会ったことないな。)

(一度、挨拶ぐらいしないといけないなあ…。)

「それじゃあ、今日は、公園でも行こうか？暖かいし、天気もいいから。雨男のマサ君にしては、珍しいよね。」

「あのですね、百歩譲って、俺は雨男だとしましょう。でも、瑞希さんも雨女ですからね！」

「私は違いますー！マサ君だけが雨男ですー！」

毎度、お馴染みのやり取り。

別に、どっちだっていいのだが…。

二人が一緒にいることさえ出来れば…。

順調に、付き合いを重ねてきていた俺達だったが…。

俺は、周りの変化に、追いつけなかった。

### 第三章 【三】

高校一年生の六月。

西高との定期戦が、目前に迫っていた時期。

この頃には、何とか練習に付いて行けるようになった。

定期戦にも、出られそうだった。

「お前、ようやくまともになって来たな。最初、あまりの酷さに、びっくりしたぞ！ホントに水野か？と思うくらいに。」

居残り練習を切り上げようかという時、高木さんに声を掛けられた。

「最初に言いましたよ。『期待ハズレになりますよ』って。」

「それにしても、酷かっただろ？『走れない』、『動けない』で。」

「去年の夏から、ほとんど体を動かしてなかったですから。」

「どうせ、女のケツを追い掛けてたんだろ？」

「だから、そんなことしてません！」

(この人とは、異性の話しかしてないような…。)

「ところで、お前はどっち派だ？」

「何がですか？」

「うちのマネージャー二人では、どっちが好みなのかってことだよ！」

「そんなこと、考えたことないですよ！」

東高バスケット部の女子マネージャーは、二人とも二年生。

美人系と、可愛い系の二人。

美人系の方は、村上優子さん。

彼女は中学時代、バスケットをやっていたらしく、背が高く、そして髪が長い。

性格がキツく、俺は苦手なタイプ。

『彼氏』もいるらしく、部活以外では、全く関係ない人だ。

もう一人は、滝本由香さん。

背の高さは、多分、瑞希さんと同じぐらい。

部活の時は、ポニーテールにっていて、ちょこちょことよく動く。

いつも、ニコニコ笑っており、少し天然。

俺的には、こっちが『ストライク』。

『彼氏』は、いないらしいが…。

俺に恋人がいなければ、好きになっちゃったかも知れない。

口が裂けても、そんなことは言えないが…。

「お前の好みからすると、滝本の方だろ？」

(この人、こういうことは鋭いな…。)

「例えそうだとしても、俺には関係ないですよ。」

「お前、女に興味ないのか？でも、中学の時は神崎が好きだったよな、確か。」

瑞希さんの名前が出て来て、少しドキツとした。

「俺は、『彼女』がいるから、関係ないんです。」

「はあ？マジか？…そしたら俺…、ちよつと余計なことしちゃったかも…。」

何故か焦り出す高木さん。

「『余計なこと』って、何ですか？」

(今度は何をしたんだ、この人は！)

「まあ、気にするな…。お前が、その『彼女』のことが好きなら問題ない…。と思う…。」

「…？」

この時は、意味が分からなかった。

「お前の『彼女』って、どんな奴？うちの学校の奴？」

「高校は違います。でも、高木さんも知ってる人ですよ。」

「勿体ぶりやがって！誰だよ！」

「神崎瑞希…です。」

「はあー？いつの間に…。お前、告白しなかったんだろ？」

「中学の時は、しませでしたけど…。でも、そのあと、色々あったんですよ。高木さんの知らないところで。」

一年間、本当に色々あった。

周りに自慢したいことや、とてもじゃないが、人には言えないこと

も…。

( そついえば、そろそろ一年経つのか…、あの日から…。 )

( 早いなあ…。 )

次の日、すっかり日課になっていた居残り練習は、この日は一人だけだった。

練習相手もないし、そろそろ帰ろうかと思っていた時…。

「あれ？水野くん…だけ？」

体育館の入口から声を掛けてきたのは、制服姿の滝本さんだった。

「滝本さんこそ、まだ居たんですか？」

全体練習が終わってから、既に一時間近くが経過している。

だいぶ、日が長くなって来たとはいえ、外はもう暗い。

「優子ちゃんと話してたら、遅くなっちゃって…。体育館の電気がついてたから、誰かいるのかもって…。ボディーガードでも頼もっかって思ってた…。」

少し顔が赤い滝本さん。

「じゃあ、俺が送って行きますよ。」

「えっ、でも…、水野くん、逆方向だし…。」

「大丈夫ですよ。滝本さん、自転車でしたっけ？」

「うっん…、歩き…。」

「だったら、尚更、一人じゃ危ないですよ！ちょっと待ってて下さい。すぐ着替えてきますから。」

「ありがとう…。」

一瞬、瑞希さん以外の女の子と、二人で帰るのはまずいかも、と思っただが…。

（これは、浮気にはならないだろ？）

（滝本さんが、困ってるわけだし。）

（もし、知らん顔したら、寝覚めが悪い。）

自分に言い聞かせながら、帰る支度をしていた。

その帰り道。

「一緒にいた村上さんは、どうしたんですか？」

沈黙が怖い俺は、何とか話題を作ろうと、必死だった。

「『彼氏』と帰っちゃった…。『彼氏』の部活が終わるのを、待ってみたい…。」

「それって、何か酷くないですか？」

「でも…、優子ちゃんに相談があるって言ったのは、私だから…。」

ポツリ、ポツリと呟くように話す滝本さん。

あまり話題がなく、すぐに沈黙の時間が訪れる。

「自転車の後ろ、乗ります？」

「…！…うん、いい…。」

歩いて十五分程度の道程が、とてつもなく長く感じた。

（滝本さんは、いつもニコニコしているから、もっと喋る人だと思っ  
っていたんだけど…。）

（瑞希さんは、いつも喋ってるからなあ。俺が黙ってても…。）

思わず、瑞希さんと滝本さんを比べてしまった。

「水野くん…、好きな人…いるの？」

「はっ、えっ？」

沈黙を破った滝本さんに、慌ててしまう俺。

「『アイツに彼女はいないと思う』って、高木くんが言ってたから…。でも、水野くん…、モテるでしょ？」

「全然、モテませんよ。告白なんてされたこともないですから。女子目線から見て、俺のどこら辺がダメなんですかねえ？」

自虐的な言葉を、あえて明るく言ってみたが…。

「私には分からない…。だって、私は…。」

全くウケなかった上に、何かヤバイ感じがした。

彼女が、どんな言葉を続けようとしたかは、分からない。

でも、これ以上、彼女の言葉を、聞いちゃいけない気がした。

「で、でも、実は俺、『彼女』いるからいいんですけど…ね…。」

「えっ…。そう…なんだ…。」

それ以降、彼女は一言も話さなかった。

(まさか、滝本さんって…。イヤイヤ、そんなはずは…。)

(自意識過剰もいいところ！)

滝本さんを家まで送り届けた後の帰り道、ずっとそんなことを考えていた。

無性に、瑞希さんの声が聞きたくなった…。

『もしもし、マサ君？どうかした？』

夜、瑞希さんに電話を掛けてしまう。

どうしても、声が聞きたくて…。

『イヤ、特に用事ってわけじゃなくて…。瑞希さんの声が、聞きたくなったというか…。』

『ホントにー！嬉しい！…？あーっ、もしかして、何かやましいことがあるでしょ？』

『そ、そんなわけないですよー！』

(す、鋭い…。)

『動揺してる感じが怪しいけど…。まあ、いいや。私、マサ君のこと信じてるよ。』

『何もやましいことはないです。だって俺は、瑞希さんが大好きですから。』

『ふふっ、知ってる！』

『…。』

(何か、『好き』って言わされた気がする。)

『部活の調子はどう?』

『今度、試合に出られそうですよ。短い時間かも知れませんが。』

『

『凄いじゃん!マサ君、まだ一年生なのに!友達に自慢しよっと!』

『そんな大袈裟な…。ただの定期戦なんですから。部員全員に出席はあるみたいです。』

『ねえ、試合の後、時間あるかな?』

『飯を食う時間ぐらいは、あると思いますけど。』

『じゃあ、お弁当、作ってく!それで、出来たら文化祭も一緒に回りたいなあ。』

『そこまで時間あるか分からないですけど、お弁当は楽しみにします!』

瑞希さんの声を聞いたら、頭の中がすっきりした気がした。

瑞希さんの声を聞く度に、やる気レベルが上がる気がした。

俺にとって彼女は、かけがえの無い存在だと実感した夜だった。

### 第三章 【四】

迎えた、定期戦の当日。

俺は、先輩達を差し置いて、スタメンだった。

練習試合では、何度かそういうこともあったが、準公式戦と言える大事な試合にも関わらず。

体育館には、想像以上に観客もいた。

「本当にいいんでしょうか？俺なんかをスタートから使っても…。先輩達を差し置いて…。」

ビビっていた俺は、高木さんに、聞いてしまう。

「何だよ、お前、ビビってるのか？たかが定期戦だぞ！お前って、そんなチキン野郎だったか？」

「そういうわけじゃなくて…。」

「お前がスタメンなことに、誰も文句はねえと思うぞ。お前は、体力さえ続けば、うちの学校じゃ一番上手いし。」

「体力がないことが、一番の問題なんですけど…。」

「それより、神崎の姿が、見えねえんだけど。お前を、応援しに来てるんじゃないの？」

そう言っつて、観客席を見回す高木さん。

(何を言っつてんだよ、瑞希さんなら、観客席の最前列にいるじゃん！)

(…っつて、そうか！高木さんは知らないんだ！瑞希さんが、中学時代から変わってること。)

高木さんとバカな話をしていたら、緊張も溶けてきた。

試合直前、観客席の瑞希さんと目が合うと、彼女が小さく手を振る。

隣にいた友人らしき女生徒に冷やかされ、彼女は顔を赤くしていた。

その笑顔を見た俺は、やる気レベルが一段上がった。

試合は、見事、東高の勝利に終わる。

俺は、そこそこやれたが、試合終盤に足がつかってしまった。

「マサ君、超格好良かった！惚れ直しちゃった！」

瑞希さんお手製の弁当を食べながら、体育館の裏で話をしている俺達。

「でも、足がつつちゃって…。」

（格好悪いところを見せちゃった…。）

「私、マサ君がシユート決めた時、喜び過ぎて、うちの学校の生徒に、白い目で見られちゃった。」

「東高を応援する生徒なんて、西高には、他にいないですからね。」

二人で食べたお弁当は、とても美味しかった。

しばらく、二人で話していると、

「水野くん、ここにいた…んだ…。」

マネージャーの滝本さんが、俺を呼びに来た。

そして、怖い顔をして俺を睨む。

「何か用…ですか？」

(俺、何か悪いことしたか?)

「西高の文化祭、見てっいていいって…。一緒に…回れば…、その彼女と…。」

「分かりました。わざわざ、すいませんでした。」

俺に伝言を伝えると、滝本さんは走り去ってしまった。

(怒られるかと思った…。)

「今の娘、マサ君のこと好きだよ…。絶対…。」

「まさか！そんなわけないですよ！」

「だって、物凄い顔で睨まれちゃったよ、私。でも、私も睨み返したけど。にらめっこなら自信あるし。」

(そういう問題じゃない気が…)。

瑞希さんは、滝本さんが睨んでいたのは、『マサ君ではなく私だ』と、言い張っていたが…。

「あの人、二年生ですよ。俺なんか、眼中にないですよ。」

「私だって二年生だよ。」

「それはそうですけど…。」

「マサ君は、年上にモテるんだね…。背が高いから…かな？それと

も…。」

(瑞希さんの考え過ぎだと思っけど…。)

予想外に時間が出来たことにより、瑞希さんと文化祭を見て回るこ  
とが出来た。

「俺なんかの相手をしてて、いいんですか？」

と聞いたが、

「平気だよ！『彼氏が来てる』って言ったら、みんな融通してくれ  
たから。でも、明日は、私が融通してあげないといけないけどね。」  
と笑っていた。

瑞希さんと一緒に校内を歩いていると、彼女の友人達に声を掛けら  
れる。

「あつ、瑞希ちゃん。ふーん、その人が噂の『彼氏』？」

その女生徒は、俺の頭の前から爪先までを、吟味するように視線を  
動かす。

「そうなの！格好いいでしょ！」

「確かに、想像してたより、いい男かも…。」

（俺は、瑞希さんの友達に、どんな風に伝わってるんだ？）

「私の『彼氏』だから、あげないよ！」

「そういつつもりじゃないよ！」

（俺は、物じゃないんだけど…。）

「さっき、バスケの試合に出てた人だよな？」

今度は、別の女生徒にも吟味される。

「そつだよ！東高で一番目立ってた選手！」

「一年生の女子が騒いでたよ。『東高のバスケット部に格好いい子がいる』って。多分、瑞希ちゃんの『彼氏』のことじゃないかなあ。」

「それじゃあ、一年生の教室の方に、行かなきゃ！『これは私の彼氏です』って、知らしめないと！」

（俺は、見世物でもないんだけど…。）

その日は、瑞希さんが終わるのを待って、一緒に帰った。

自転車を並べ、話をしながら帰る。

いつもとは違う状況が、新鮮だった。

(こつこつやって帰るのも、いいかも……。)

東高に進学したことを、ほんの少しだけ後悔した。

瑞希さんの家に着き、家の前で、彼女に別れを告げようとしたが、

「今日も上がって行きなよ！」

彼女に引き留められる。

「今日は止めときますよ。」

「ちょっとだけでいいから、上がってってよ！」

半ば強引に、家の中まで引っ張って行かれた。

この日は、少し疲れていたこともあり、そんなつもりは全くなかったが…。

欲望に逆らえず、体を重ねてしまう…。

この日は、俺が彼女を押し倒したのではなく、彼女が俺を押し倒した…と思う。

「じっしてると、幸せな気持ちになれるね！」

裸で抱き合っている最中、彼女が言った。

この言葉で、俺の中で、何かのタガが外れた…、気がした…。

俺は、彼女が発した小さなサインに、気付いてあげることが出来なかった。

## 第四章 【序】

『じゃあ、今から迎えに行くね。』

『お願いします。』

『マー君、ホントごめんね。電話に気付かなくて。』

『もう、いいですよ。じゃあ、待ってますから。』

ようやく、身重の妻に電話が繋がった。

電話に出なかった理由は、寝ていたかららしい。

最近、夕方になると眠くなると言っていたし、寝起きの声だったから、疑う必要もないだろう。

(まったく、脅かしやがって!)

少し腹が立ち、横で空を見上げている、俺を脅かした張本人を睨む。

そのOL風の女性が、俺の視線に気付いた。

「電話…、奥さん？」

俺の睨みは効かなかったようで、悪びれもせず問い掛けてくる。

「そうです。寝てただけらしいですよ。」

「ふーん…。何で奥さんに敬語で話すの？尻に敷かれてるの？」

（この人は、空気が読めないタイプなのか？）

「尻に敷かれてるのは、否定出来ませんけど…。話し方は、一緒に働いていた頃からの名残が、まだあって…。」

「ふふつ、尻に敷かれてるんだ！」

バカにしたような笑いに、益々、腹が立ってくる。

「奥さんの方が年上だから、仕方ない面もあるんですよ！」

「ちょっとからかっただけなのに、ムキになることないじゃん！」

（俺に喧嘩を売ってるのか、この人は！）

（その喧嘩、買ってやるうじゃないか！）

「お姉さんは、結婚してないんですか？、迎えもないみたいですね。」

考え付く限りの中で、一番の武器を出す。

「私ぐらいの年齢の女性に、そういうことは聞くなって教わらなかった？」

「…。」

渾身の一撃は、いとも簡単に、弾き返されてしまった。

「結婚は…してないよ…。」

「えっ…。」

彼女は、少し間を開けてから、先程の俺の質問に、答えを返してきた。

急に素直になられ、妙に焦ってしまっ。

そんな俺にお構い無く、彼女は話を続ける。

「昔…、高校時代に、凄く好きな人がいて…。その人と、付き合ってたんだけど…。」

ポツリ、ポツリと呟くように話し出す彼女。

「…。」

(急に、何なんだよ。俺に、聞いて欲しいのか?)

「ずっと一緒にいられると、思っていたんだけど…。お互いの中で、ちよっとずつ何かが変わって…。」

「…。」

(俺は、何か反応した方がいいのか?)

「ある時、私の軽率な行動で、全てが壊れちゃったの…。彼の信頼を裏切っちゃって…。」

「ふーん…。」

一応、相づちを打ってみたが、彼女はそれを望んではないようだ。

「それから、男の人を好きになるのが、怖くなっちゃって…。それ以来…、『彼氏』すらない…。」

「その人…、今はどうしてるか、知ってるんですか？」

「別れてから…、街で女の人と、楽しそうに歩いているのを見たことがあったけど…。今は、結婚して幸せになってるんじゃないかなあ…。」

「まだ、その人のこと…、好きなんですか？」

「さあ?…よく分かんない…。」

ちよつとした、反撃のつもりだったが…。

聞いちゃいけないことを、聞いてしまった気がした。

「何か…、すみませんでした…。」

「何でキミが謝るの?」

「何となく…。」

「ふふっ…。」

先程のバカにしたような笑いではなく、淋しそうな笑いだった。

人は、ちょっとしたきっかけで、相手のことが好きになる。

そして、築き上げた関係は、些細なことが原因で、簡単に壊れてしまふ。

人を好きになるのは簡単だが、壊れてしまった関係は、簡単には修復出来ない…。

## 第四章 【一】

俺達は、二度目の夏を迎えた。

インターハイの県予選も始まり、東高バスケット部は、順調に勝ち上がる。

俺は、一応、レギュラーとして試合に出る。

試合の日、瑞希さんは、応援に来てくれていた。

俺は、彼女の前でなら頑張れる気がしていた。

しかし、残念ながらと言うか、やはりと言うか、私立高校の壁に弾き返されてしまう。

公立高校で、少人数の俺達の高校では、当然の結果と言えるかも知れない。

試合後、三年生達は涙を見せた。

一緒に試合に出ていた俺も、その姿を見て、涙が溢れそうになる。

（俺が、もう少し頑張れば……。）

しかし、まだ一年生の俺は、泣いちゃいけない気がして、必死に涙を堪えていた。

「惜しかったね…。」

試合後、応援に来ていた瑞希さんに、慰められるが…。

「『惜しかった』じゃ、ダメなんですよ…。三年生は最後の大会だったんだから…。」

俺は、彼女の前で、少しだけ泣いた。

そして、迎えた夏休み。

バスケット部は、高木さんが新キャプテンになり、新チームが既に始動していた。

俺は、主力の一員として、相変わらず、部活三昧の毎日。

高木さんと俺は、全体練習が終わった後、毎日、居残り練習をするのが日課になっていた。

「やっぱり、お前、スゲーな。俺は、バスケじゃお前に勝てる気がしねえ！」

悔しそうな高木さんの言葉。

この頃の俺は、体力も付き、技術も向上してきたことを実感していた。

「俺なんか、まだまだですよ。先輩達のフォーローがないと、全然ダメです。」

(ここで安心したら、中学時代の二の舞だしな。)

「ところで、お前、マネージャーの滝本に、何か言われた？」

「何も言われてないですけど。何ですか？」

「それならいいんだ…。しかし、神崎の奴、変わったよな。『女は化ける』とは、このことだな。」

微妙に、話を逸らされた気がしたが…。

高木さんは、瑞希さんに再会した時、啞然としていたことを思い出した。

「『俺の彼女』ですからね…。」

「お前は、何を心配してんだよ！お前から取るうなんて、これっばうちも、思ってたねえよ！俺も、『彼女』いるし。」

高木さんの『彼女』は、同じ高校の二年生。

結構、可愛い人だが、非常におとなしい。

その彼女も、県大会の時、応援に来ていた。

瑞希さんと並んで応援している姿を見掛けた。

瑞希さん曰く、『話し掛けないと、話してくれない女の子』らしい。

そういうタイプは、俺には無理だ。

瑞希さんみたいなタイプじゃないと…。

(高木さんは、どうやって口説き落としたんだ？)

夏休みは、例え部活があったとしても、授業がある日々に比べれば、少し余裕がある。

デートをする時間は、たっぷりあった。

瑞希さんと付き合い始めて、ちょうど一年が経った日には、市民プールへ行った。

そしてこの時、一年前と、何かが変わっていることに、俺は初めて気付いた。

「今日も楽しかったね！」

「そうですね…。」

プールから帰る時、いつものようにはしゃいでいた瑞希さんに、微妙な返事を返してしまう。

俺は、ちょっとした違和感を感じていた。

（去年は、めちゃめちゃ楽しかったけど…、今年はそうでもなかったよな…。）

彼女の水着姿を見ても、一年前ほどの感動もなく…。

（何でだろう？水着の中まで、見たことがあるからか？）

辛うじて、前年と違う水着であることは気付いたが…。

「今日も、家に行ってもいいですか？」

プールの帰り、瑞希さんに聞く。

あまりに露骨な問い掛けだったが…。

「いいけど…。今日は家に、うちの親、いるよ…。」

彼女の反応も、いつもと違う。

この日は結局、彼女の家の手前で、キスをして別れた。

(彼女の親に、挨拶するべきじゃなかったのか?)

気付いた時は、もう遅かった。

残りの夏休みの日々は、出来るだけ、瑞希さんに会う。

しかし、それはデートと呼べる代物ではない。

部活が午前中で終わった日に、彼女の家に行き直る。

そして、彼女とセックスをする。

何処かへ出掛けるわけでもなく、欲望の赴くまま、彼女の体を求めた。

彼女が、拒まないのをいいことに…。

夏休みも終わりに近付いたある日。

やることをやった？あと…。

「ねえ…、マサ君…。」

「何ですか？」

「私…、子供が出来た…って言ったら…、どうする？」

「えっ…、出来た…んですか？」

血の気が引き、頭が真っ白になる。

「例えばの話だよ…。」

「出来て…ないんですか？」

「当たり前じゃない！ちゃんと、避妊だけはしてたし…。例えば…、  
そうだったら、マサ君はどうするかと思って…。」

「『どうする？』って言われても…。俺達…、まだ高校生だし…。」

この時は、そう答えるしかないと思った。

「そうだよね、当たり前だよね。ごめんね、変なこと言って！忘れ

て！」

「…。」

（何だよ！俺を試すみたいなのを言って！）

俺は、ホッとすると同時に、苛立ちもあつた。

冷静に考えれば、これは非常に分かりやすい、彼女のサインだった。

今なら、普通に気付く。

しかし、高校生ではそう簡単にはいかない。

ましてや、動揺や苛立ちがあつたこの時では…。

「私、バイトしよつかなあ。」

「バイトですか？…いいと思いますけど…。」

表面上は、賛成して見せたが…。

「その顔は、マサ君、心配なんですよ？」

「少し…。」

「デートする時間は、ちゃんと作るから大丈夫だよ！」

俺が心配しているのは、そこじゃない。

( 瑞希さんみたいに可愛い娘なら、絶対、男が寄って来るだろ……。 )

( ちょっと無防備だからなあ、この人……。 )

この時、『心配だ』と、ちゃんと伝えるべきだった。

しかし、変なプライドが邪魔をして、口に出すことが出来なかった。

彼女の家に上がったのは、この日が最後だった。

## 第四章 【二】

新学期を迎えると、また月一回のデートに戻る。

俺は、以前にも増して、部活中心の日々。

学校には、勉強ではなく、部活をしに行く感じ。

『バスケットは中学で卒業』と思ってたことが、嘘のように…。

瑞希さんは、土日にファミレスでバイトを始める。

俺達が、入り浸っていたことがある場所だった。

二人の間に、すれ違いが起こっても、おかしくはなかったが…。

九月は、お互いの休みを上手く合わせることが出来、映画を見に行った。

この日は、睡魔に負けることは無かったが、天気はやはり雨だった。

『雨男』 『雨女』 のやり取りは…した…記憶がない。

十月は、ちょっと危なかった。

予定していたデートの日、急に部活の練習試合が入ってしまう。

幸い、練習試合は午前中で終わり、その足で瑞希さんのところへ向かった。

この日は、彼女の家ではなく、外で待ち合わせをしていた。

そして、十一月。

恐れていたことが、起こってしまった。

デートの約束をしていた日の前夜、瑞希さんから電話が掛かって来る。

『マサ君、ごめん！明日、バイトが入っちゃった…。』

『えっ！どっしして…。』

楽しみにしていただけに、ショックがでかい。

『急に、シフト変わってくれって言われて、断り切れなかったの。』

『…月一回の約束は…、どうするんですか？』

『別の日じゃ…ダメ？』

『今日は、部活が休みなのは、明日だけなんですけど…。』

『そっか…。じゃあ、平日で空いてる日は？』

『全部、部活ですよ！』

思わず、声を荒げてしまった。

『そんなに怒らないでよ！ごめんって言ってるでしょ！』

『怒ってないですよ！それで、約束はどうするんですか？』

『どうしよう…か？』

『それは、俺が聞いてるんです！このままじゃ、今月は、会わないってことになりますよ！』

『だから、怒らないでって言ってるじゃん！そんなに言うなら、マサ君、部活サボってよ！一回ぐらい、いいでしょ？』

『そんなわけには、いかないですよ！俺は、一応、レギュラーなんだし。』

『マサ君は、私よりバスケの方が大事だもんね!』

『そんなこと、誰も言ってないでしょ!』

『もういい!』

そこで、電話は切れた。

お互い感情的になってしまい、思いも寄らぬ大喧嘩に発展してしま  
った。

一方的に電話を切られたあと、俺はすぐに後悔するが…。

(今回、俺は悪くない!)

すぐにも謝りたかったが、先に謝ったら負けな気がしていた。

翌日の午後、彼女のバイト先に行ってみようと思い、家を出たが…。

直前で引き返し、家に戻った。

その間、何度も携帯電話を取り出し、メールで謝ろうと思ったが、  
実行に移すことは出来なかった。

その日の夜、携帯電話が鳴る。

発信者は、『神崎瑞希』だった。

一瞬、電話に出ることを躊躇したが…。

『もしもし、マサ君？良かった、出てくれて。』

瑞希さんの、ホツとしたような声だった。

怒ってはいないようだった。

『何か用ですか？』

本当は嬉しいはずなのに、わざと冷たい返事をしてしまう。

『何よ、その言い方！…じゃなくて…。今、マサ君の家の前に来てるの…。ちよっと、出て来れない？…っていうか、出て来て！』

『分かりました。すぐ行きます！』

そして俺は、電話を切るや否や、部屋を飛び出した。

階段を駆け降りながら、何処にいるのか聞かなかったことに気付くが…。

瑞希さんは、あのにわか雨の日、俺達が再会した場所にいた。

「マサ君、慌て過ぎ！そんなに焦らなくても良かったのに。」

電話を切ってから、ものの数秒で現れた俺に、瑞希さんは驚いていた。

「…で、何か用ですか？」

電話に出た時のように、冷たい返事を返すが…。

今更、そんな態度を取っても遅いのだが…。

「ふふっ、可愛い反応！」

そう言って、彼女は笑顔を見せた。

「今回、俺は悪くない…ですからね！」

「うん、今回は私が悪い。ホントにごめんなさい。昨日の電話の態度も、ごめんなさい。」

「いや、俺の方こそ、すいませんでした…。」

素直に謝られてしまい、思わず、俺も謝ってしまった。

「何で、マサ君も謝るの?」今回、俺は悪くない!」、じゃないの?」

「何となく…。」

取り敢えず、別れの危機は脱したかに思えた。

『月一回は必ず会う』という約束は、この月も守ることが出来た。

この日、俺は、彼女が乗っていた自転車を片手で押しながら、彼女を家まで送る。

そして、もう片方の手は、彼女の手を握る。

この時、俺はドキドキしていた。

繋がれた手から、彼女のぬくもりが伝わって来ていたから…。

「今日、バイト先の店長に、『シフトの変更のことで、彼氏と喧嘩した』って言ったらね、代わりに来月は、二十四日と二十五日、両方とも休みになったの。マサ君、部活ある?」

歩きながら、瑞希さんが聞いてきた。

「二十三日から遠征に行かなくちゃいけないで、帰って来るのは、二十四日の夜になるんですけど…。でも、その代わり、二十五日は休みですから！」

「じゃあ、来月は二十五日だね！」

「また、プレゼント交換しますか？あんまりお金ないですけど。」

「今年は、プレゼントはいらさないよ。その日、久し振りに、私の家においで！私、ケーキ作るから、私の家で一緒に食べよ！」

「でも…。」

「もし、したくなくても平気だよ！その日は、うちに誰もいないから！」

「だから、何をしたくなるって言うんですか！」

「私の口から言わせる気？」

「…。」

（また始まったよ…。）

（でも、いついつといるが瑞希さんらしいけど。）

初めてと言ってもいいぐらいの大喧嘩は、結果的に、すれ違い始めていた俺達を、元の道に戻してくれた…気がした。

俺達は、以前のように戻れた…気がした。

彼女と手を繋いだのも、キスをしたのも、この日が最後だった。

俺に向ける笑顔を見たのも…、最後だった…。

## 第四章 【三】

高校二年生の冬。

クリスマススイブの日。

俺は、遠征先の駅の売店で、ある携帯ストラップに目が止まった。

それは、二つが対になっているタイプのもの。

二つに割れたハート型の飾りを、それぞれのキャラクターが片方ずつ持っており、二つを合わせるとハートの形になるものだった。

（クリスマスプレゼントは、いらないうって言ってたけど…。）

俺は、その携帯ストラップを一組、買う。

二つ合わせても、二千円もしないものだった。

その日、家に着いたのは予定より早く、まだ六時前。

家に着き、着替え終わると、早く、プレゼントを渡したくて、ウズウズして来る。

そして、居ても立ってもいられなくなり、俺は家を飛び出した。

一組の携帯ストラップを握りしめ…。

(瑞希さん、喜ぶかな?)

瑞希さんの笑顔が、早く見たいだけだった。

一度、電話してから行くことも思ったが…。

(急に行つて、びっくりさせてやろう!)

瑞希さんの驚く顔が、見ただけだった。

俺は、自転車に飛び乗り、十分と掛からない道程を急いだ。

彼女の家に着き、チャイムを鳴らすが、応答はない。

(何だ…、留守か…。)

(何処に行つたんだ? 今日、バイトは休みだろ?)

すぐに帰って来るものだと思い、家の前で待つことにした。

それから、どれぐらい待っていただろうか？

恐らく、二時間近く経っていただろう。

さすがに、寒さに耐えられなくなり、今日は諦めて帰ろうとした時、こちらに向かって来る人影を見つけた。

話し声や笑い声が聞こえてくる。

段々と近付いて来た人影を見て、俺は茫然としていた。

その人影は、瑞希さんだったが、一人ではなかった…。

俺達と同年代らしき男と、一緒だった…。

彼女は一人っ子だから、兄弟であるはずがない。

従兄弟でもないはずだ。

俺は、その場に立ち尽くして、動けなかった…。

「あっ、えっ…、マサ君！」

俺に気付いた彼女が、驚きの声を上げる。

この日、彼女は、一年前に俺があげたクリスマスプレゼントを、付けて…いなかった…。

「…。」

声が出ない。

何も考えられない。

「マサ君、違うの！あのね、この人は…。」

この時点で俺は、彼女に背を向け、自転車に乗り、走り去ろうとした。

「マサ君、待って！お願い、話を聞いて！」

「…。」

俺は何も言わず、自転車のペダルを漕ぎ始めた。

「待ってってば！お願い、待ってよ！」

俺の背中に向かって叫ぶ彼女の声は、涙声だった。

自転車を漕ぐ俺の顔に、冷たいものが当たる。

雪がチラつき始めていた。

）どおりで、寒いわけだ…。）

その日、瑞希さんから、何度も着信があった。

言いたいことや、聞きたいことは山ほどあったが、俺は、一度も電話に出なかった。

とてもじゃないが、冷静に話せそうもない。

そして、煩わしくなった俺は、携帯電話の電源を切った…。

その日は、色々なことが、頭の中を駆け巡り、中々、寝付けなかった。

何を考えていたかは、思い出せない。

思い出したくもない。

翌朝、習慣というものは恐ろしいもので、寝付けなかった割りには、

いつも通りの時間に目が覚める。

携帯電話の電源を入れ、履歴を確認する。

着信履歴六件、留守番メッセージ一件、メール受信二件。

全て、瑞希さんからだった。

留守番メッセージを確認する。

『お願い…、マサ君…、電話に出てよ…。』

涙声の瑞希さんだった。

メールを確認してみる。

一件目『許して欲しいとは言わない。話だけでも聞いて欲しい。』

二件目『電話がイヤなら、メールでもいい。言いたいことがあるなら、言って欲しい。私はどんなことでも聞く準備があるから。』

彼女の悲痛な叫びに、俺は、返信しなかった…。

その日、落ち着いて家に居ることが出来ず、近所のバスケットコートで体を動かした。

俺の心とは裏腹に、外は雲ひとつない、いい天気だった。

お昼頃、さすがに腹が減ってくる。

( そついえば、昨日の夜から何も食べてないんだっけ…。 )

重い足を引きずり、家に戻ることにする。

マンションの前に辿り着くと、入口に人影を見つけた。

俺は、その人影に、心当たりがあった。

メガネを掛け、肩まで伸びた黒髪を二つに縛っているおさげ髪の子。  
の子。

「おかえり…、マサ君…。」

俺のことを、『マサ君』と呼ぶのは、一人しかいない。

その娘の目は、メガネに隠れてはいたが、明らかに充血しており、  
目の周りが腫れているのが分かった。

「…。」

俺は、立ち止まることなく、振り返ることもなく、無言でマンションの中に入って行った。

「お願い…、待って…。」

彼女は、俺の背中に、力なく呼び掛けた…。

家の中に入ると、携帯電話を取り出し、メールを打つ。

宛先『神崎瑞希』

本文『今まで、ありがとうございました。とても楽しかったです。そして、さようなら。』

メールを送信し、携帯電話のメモリーから『神崎瑞希』を削除する。

しばらく、部屋の窓から外をボーッと眺めていた。

数分後、高校生ぐらいの女の子が、自転車を押しながら歩いて行くのが見えた。

遠目に見ても、泣いているのが分かった。

彼女の声を聞いたのも、姿を見たのも、この日が最後だった。



## 第四章 【四】

俺の人生で、最悪のクリスマスが過ぎた後…。

二、三日が経ち、冷静さを取り戻してくると、俺は後悔し始める。

（話ぐらいは聞いてあげても、良かったかも…。）

（単なる誤解だったかも…。）

（もう、瑞希さんの笑顔が見れなくなるのは…、辛いな…。）

しかし、今さら後悔しても、全てが遅かった。

仮に、仲直り出来たとしても、元通りには、きっと戻れない。

俺達の『約束』は、お互いの信頼関係の下に成り立っているものだったから…。

一度、壊れてしまったら、元に戻すことが出来ないほど、儂いものだったから…。

傍から見れば、馬鹿らしく思えることも知れない。

しかし、『月一回のデートの約束』が、二人の間で成り立っていたのは、約束を守ろうとするお互いの強い意志と、お互いに対する信用があつてこそ成立する。

その前提が崩れてしまったら、俺達にはどうすることも出来なかった。

その年の暮れ、俺宛ての小包が届く。

差出人は、『神崎瑞希』。

荷物の中身は、マフラーと一通の手紙だった。

『マサ君へ

本当は自分の口から直接、言いたかったけど、それは叶わないようなので、手紙を書きます。

伝えたいことは、たくさんあるけど、まず始めに、こうなっちゃった原因について、説明しないといけないよね。

あの日、高校の友達に、「カラオケ行かない？」って誘われたの。  
もちろん、女の子の友達だよ！

ケーキの準備も終わって暇だったし、友達同士だから何の問題もないと思った。

でも、そこには、男の子達もいたの。

いわゆる、「合コン」ってやつ。

帰ろうとしたけど、強引に引き留められちゃって。

あの時、一緒にいた人は、帰る方向が一緒だったから、送ってもらっただけ。

もちろん、断ったけど、夜だったし。

あの人は、友達だったわけでもなくて、初めて会った人。

「私には彼氏がいる」って、ちゃんと伝えてあった。

高校は違うし、連絡先だって知らない、教えてもない。

こうやって書いてて思うんだけど、私の行動は軽率すぎるよね。

全部、言い訳に聞こえるよね。

本当に、ごめんなさい。

マサ君は、私を信用してくれてたのに、それを裏切ってしまったのだから、許してくれなくて当然だよな。

去年の夏、私達が出会えたのは奇跡的だよな。

私なんか、運命を感じちゃった！

それからの日々は、本当に楽しかった。

全てが新鮮だった。

私は、マサ君をからかって、面白がってばかりいたけど、マサ君に愛想を尽かされなくて、本当に良かったよ（汗）。

私のワガママに、いっぱい付き合ってくれてありがとう。

でも、本音を言つとね、私は淋しかった。

月一回だけしか会えないなんて、淋し過ぎる。

だって、好きなんだから当然でしょ？

もっと、いっぱい会いたかった。

色んな所に、二人で遊びに行きたかった。

一緒の高校に来て欲しかった。

ずっと一緒にいたかった。

子供が出来てたら、ずっと一緒にいられたかなあ。

こんなこと言うと、また、マサ君を困らせちゃうね。

私は、今でもマサ君が好き！

マサ君は、私に初めてをいっぱいくれたから、簡単に忘れることは出来ないよ。

初めての恋、初めてのデート、初めての彼氏、初めてのキス、初めてのエッチ。

初めての別れは、いらなかったけど。

今まで、本当にありがとう。

私も楽しかった。

また、どこかで、私が雨宿りをしていたら、傘を貸してね。

マサ君が雨宿りをしていたら、私が貸してあげるよ。

マサ君は雨男だから、意外と早く、その機会が訪れたりして！

その時は、友達として、また、いっぱい話そうね。

その時、マサ君はどんな風になっているのかな？

マサ君が、大人になって行くところを、傍で見ていることが出来ないのは、ちょっと淋しいけど。

バスケット、頑張ってね！

陰ながら、応援しています。

それじゃあ、さようなら。

瑞希より

P・S・

一緒に送ったマフラーは、クリスマスプレゼントです。

一応、手編みだったんだけど。

私には、捨てる事が出来なかったから、マサ君が処分して下さい。

▣

その手紙は、所々、文字が震えており、滲んでいるところもあった。

彼女が、どんな状態でその手紙を書いていたのか、容易に想像することが出来た。

俺も、涙が止まらなかった。

机の上に置きっぱなしだったストラップと、瑞希さんからのその手紙は、引き出しの奥にしまった。

マフラーも、タンスの奥にしまい込んだ。

その時は、捨てることが出来なかった。

俺は、一体、彼女の何処を見ていたのだろうか？

ちょっと天然で、よく喋り、よく笑う、彼女の表面しか見ていなかったのではないか？

彼女にしてやれることは、いくらでもあったはずなのに…。

彼女の本音に、気付いてあげることだって、出来たはずなのに…。

『早く会いたかったから、早退して来た。』

『一緒の高校に来て欲しい。』

『塾、サボってよ。』

『最初の約束、守ってよ。』

『ちょっとだけでいいから、家が上がってって!』

『もし、子供が出来たらどうする?』

『一回ぐらい、部活、サボってよ!』

数え上げたら、キリがない。

今さら後悔しても、全てが遅すぎる。

全てが終わってから気付いたって…。

今にして思えば、彼女から手紙が届いた時、彼女と一からやり直すチャンスだったかも知れない。

全てをリセットして、最初からやり直す、唯一のチャンス…。

彼女からの手紙、手編みのマフラー、一組の携帯ストラップを持って、彼女の下へ走って行けば…。

当時の俺は、それに気付いていなかったのか、それとも、気付いてはいたが、あえて、そうしなかったのか、思い出すことは出来ない。

瑞希さんとの思い出は、ここで終わり。

その後、偶然、再会することもなく、俺は大人になった。

## 第四章 【五】

瑞希さんと別れた後…。

年が開けた後の、バレンタインデー。

朝、下駄箱を開けると、チョコレートらしきものと、メッセージが書かれた紙が入っていた。

思いも寄らぬ出来事だったが…。

『水野正宏くんへ』

伝えたいことがあります。

昼休み、屋上で待っています。

滝本由香』

紙には、そう書かれていた。

『伝えたいこと』とやらには、心当たりがあった。

俺が、瑞希さんと別れたという話は、バスケット部員には、あつという間に広まってしまった。

高木さんにしか、言っていなかったのだが…。

俺も、口止めはしなかったし、隠しておくことでもないと思ったから、特に気にしていなかった。

みんなに、少し気を使われている感じがして、気持ち悪かったが…。

その中で、滝本さんは、みんなと少し違っていた。

それまでは、何だかよそよそしかったが、よく話し掛けて来るようになる。

『遅くなっちゃったから送ってって』と、言われることもあった。

(この人、俺のことが好きなのかも…。)

そう思ったが、俺からどうこうするつもりは、全くなかった。

嫌いなわけでは、勿論ないが、『異性として好きか?』と問われると、甚だ疑問だった。

「『伝えたいこと』って、何ですか?」

こういう場面は、いかなる時でも緊張する。

出来るだけ平静を装い、滝本さんに問い掛けた。

「もう、気付かれてるかも、知れないけど…。水野くん、『彼女』と別れたばかりだから…。こんなこと言うのは、どうかとも思うんですけど…。」

「…。」

(予想通りの展開だな…。)

「私…、水野くんが好き!初めて会った時から、ずっと…。私と付き合ってください!」

皮肉にも、瑞希さんの直感は、当たっていた。

「…。いいですよ…。」

一瞬、間を置いて、滝本さんの気持ちに応える。

一瞬の間には、ある人の顔が浮かんでいた。

「本当にー！やったー！」

満面の笑みを浮かべた滝本さんだったが…。

俺は、深く考えずに返事をしたことを、少し後悔していた。

(いつまでも、瑞希さんを引きずってられない。)

(付き合っていれば、そのうち、好きになるだろう。)

(前の恋を忘れるには、新しい恋が一番って言うし。)

そう自分に言い聞かせ、後悔の念を消そうとした。

バスケットの方は、というと…。

「お前、最近、絶好調だな。」

「確かに、調子はいいかも知れないですね。」

相変わらず、高木さんと居残り練習を続けていた。

「ヘタレでチキン野郎のクセに、何か腹立つ！神…じゃなくて…、  
滝本もこんな奴の何処がいいんだか！」

憎まれ口を叩く高木さん。

「見てる人は、見てるってことですよ！」

「ふん！今日は、このへんで勘弁しといてやるよ！滝本も待ちくた  
びれただろうし。」

振り返ると、滝本さんは、いつものように、ニコニコしながら俺達  
を見ていた。

『好事魔多し』とは、よく言ったもので…。

高校二年生になり、恒例の定期戦を控えた、ある日の練習中…。

俺の膝に激痛が走る。

これは、誰かの所為というものではない。

単なるアクシデントだった。

強いて言うなら、俺の油断の所為だった。

練習中、足を滑らした俺は、チームメイトの足を払う格好になってしまっ。

そして、倒れこんで来たそのチームメイトの体が、俺の膝の上に落ちて来た。

全治六ヶ月の重症だった。

定期戦は、勿論、アウト。

インターハイの県予選も、絶望だった。

一応、ユニフォームを着て、ベンチには入っていたものの、試合には出られない。

試合終了後、高木さん達が崩れ落ちるのを、ただ見ていることしか出来なかった。

この上なく、齒痒かったが、涙は出て来なかった。

夏休みに入ると、滝本さんは予備校に通い始め、俺はリハビリが始まる。

怪我の回復経過は、順調だった。

学校がある時は、授業中以外は、ほぼ一緒に居たと言っていい俺と滝本さんだったが、夏休みになると、パタリと会わなくなってしまう。

彼女は、毎日、予備校へ。

俺は、リハビリの為に病院へ行ったり、部活に顔を出したりの毎日。二人で、何処かへ出掛けるところか、休みの間、一度も会わなかった。

メールぐらいは、していたが…。

彼女のことを、好きになってきたかもと、思い始めてはいたのだが…。

新学期が始まってすぐの、昼休みに、滝本さんと話していると、

「水野くん…、私のこと…本当に好き？」

と、彼女に聞かれた。

「…、好き…ですよ…。」

微妙な間を置いて、返事をしてしまった。

「嘘つかなくても、いいのに…。『前の彼女』のことが…、まだ好きなんでしょ？」

痛いところを突かれたが…、それは、滝本さんの誤解と言っていい。

完全に忘れたわけではないが、忘れかけていたことではある。

「私達、何度かデートをしたこともあったけど、夏休みの間、一度も会わなかったよね？本当に好きなら、そんなこと、有り得ないでしょ？毎日でも会いたいと思うのが、普通でしょ？」

「それは…。夏休みは、お互い、忙しかったし…。」

「その合間を縫ってでも、『会いたい』とは、思ってくれないんだね…。」

「…。」

返す言葉がない。

「これから私達は、会う時間が、もっと少なくなっていくのに…。」

「これからは、なるべく時間を作りますよ…。」

「それに、私達、付き合い始めて半年経つのに、手だって繋いだことないでしょ？」

「それは、ちょっと照れ臭いからで…。」

「『私と付き合ってる』ってことを、見せたくない人がいるんじゃないの？」

「どういう意味ですか！」

「私と手を繋いでいるところを、元カノに見られたくないんじゃないかってこと！」

「何だよ、それ！」

（言っていていいことと、悪いことがある！）

（この人は、そんなことも分からないのかよ！）

滝本さんの誤解から始まった痴話喧嘩は、売り言葉に買い言葉で、どんどんエスカレートしていった。

「私、水野くんのこと好きだけど…、もう、無理かも…。」

「別れるってこと…ですか？」

「うん…。」

(俺は、何度、同じ失敗を繰り返せば、気が済むんだろう?)

この日、俺は、滝本さんにフラれてしまった。

辛い出来事に違いなかったが、今回、涙は出て来なかった。

(『人を好きになる』って、どういうことだよ…。)

(『付き合う』って、どういうことだよ…。)

(『恋人』って、どういうことだよ…。)

何もかも分からなくなってしまった俺は、異性を好きになるのが怖くなってしまった。

滝本さんにフラれた日、どうしても体を動かしたくなかった俺は、少しだけ、部活の練習に加わる。

しかし、すぐに激痛が走り、続けることが困難になった。

歩けるようにはなっていたが、走れないのだから、無理もない話な

のだが…。

元通りに動けるようになるのは、無理のような気がして、俺の気持ちはずつりと切れる。

次の日から、練習に顔を出すことも辞めた。

正式に退部したわけではないが、怪我が完治した後も、一度も練習に出ないまま、部活を引退した。

それ以来、バスケットボールを触ってもいない。

俺は、何度も同じ失敗を繰り返す、どうしようもない奴だ。

## 最終章

こんな天気の日、長い間、立っていると、膝が疼いてくる。

もう完治はしているし、日常生活に支障はない。

運動だって、問題なく出来る。

無意識に膝を触っていると、

「膝、どうかしたの？」

例のOLさんが、また話し掛けてきた。

「高2の時、大怪我しちゃって。完治はしてるんですけど、こんな天気の日、疼いてくるんです。」

「そうだったの…。知らなかった…。」

「…？」

（知らなくて当たり前だろ？）

（何か変だな、この人…。）

（見た目と違って、天然なのか？）

「奥さん、遅いね。家は遠いの？」

「いえ、近いんですけど…。出掛ける時は、いつも時間が掛かる人なんです。昔から…。」

「恐妻家のキミは、文句を言えないんだね！でも、一回ぐらい、ガツンと言ってやれば？」

「それが出来たら、苦勞はしませんよ！文句を言おうものなら、何倍にもなって返って来るんですから！」

「ふふつ、仲いいんだね…。ちょっと羨ましい…。」

「…。」

（また、余計なこと、言っちゃったかも…。）

淋しそうに笑う彼女を見て、申し訳なく思った。

「さつきは…、ごめんね。重たい話をして…。」

「そんなこと、気にしないでいいですよ。俺が、余計なことを聞いたのが、いけなかったんですから。それに、人に話せば、楽になることもありますから。」

「相変わらず、優しいんだね…。」

「…！」

（また、『相変わらず』って言った！）

（今度は、確かに言ったぞ！）

（やっぱり、俺のこと、知ってるのか？）

（名前を聞いてみたいけど…。）

（結婚してるのに、ナンパみたいなことするわけにはいかないし…。）

「ちょっと小降りになって来たみたい。」

彼女がそう言った時、妻が運転する車が、駅のロータリーに入ってくるのが見えた。

「俺は、お迎えが来たみたいです。」

「今日は、話し相手になってくれてありがとうだね。いい暇潰しになったよ！キミに話せて、スッキリした。『結婚っていいかも』って、ちょっと思った…。」

「お役に立てて、幸いです。」

「ふふっ！」

(あつ、ウケた。)

この時、彼女は、一番の笑顔を見せた。

「それじゃあ、お先に！」

「お疲れー！」

彼女は、小さく手を振った。

プップー！

妻が、車のクラクションを鳴らす。

そして、車に向かって、走り出そうとした時…。

『さよなら、マサ君』

「えっ！」

『マサ君』と言われた気がして、彼女の方を振り返る。

彼女は、また空を見上げていた。

(気のせいか…。)

「遅いですよ、美咲さん！」

車に乗り込み、妻に文句を言う。

「ごめん、ごめん！支度に手間取っちゃって！」

妻は、謝ってはいるが、きっと、反省はしていない。

（車で迎えに来るだけなのに、どんな支度が必要なんですか！）

という言葉は、言えるわけがなく…。

俺は溜息をつきながら、何気なく窓の外を見る。

そして、雨宿りをしていた場所で視線が止まる。

（あれ？あの人、傘、持ってるじゃん！）

ちょうど、あのOLさんが、傘をさして歩き出すところだった。

雨でよく見えなかったが、何故か、泣いているように見えた。

「ねえ、美咲さん。」

「何？」

「俺達が出会った日って、どんな天気でしたっけ？」

（俺は、何故、こんなことを聞いたのだろうか？）

「はあ？…多分、晴れだったと思うけど？」

「それじゃあ、付き合い始めた日は？」

「その日も、晴れだったような…。」

「結婚式の日は？」

「雲ひとつない快晴…だったけど…。急に、どうしたの？何か変だよ、マー君。」

（やっぱり俺は、『雨男』じゃないじゃん！）

〈完〉

## 最終章（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

ご意見、ご感想がありましたら、お寄せ下さい。

この話を作るに当たって、イメージしたのは、『不純な純愛』です。その為、性表現が多く含まれていることを、ご容赦下さい。

（第一章について）

第一章は、正宏と瑞希の出会いから、付き合い始めるところを書いています。

出会いの場面で、お互いに、都合良く一目惚れします。かなりベタな展開で、失笑してしまった方もいたかも知れません。この話を作る上で、出会いのシーンは、出来るだけベタな展開にしようと思っていたので、失笑を買うのは覚悟の上です…。

（第二章について）

第二章は、恋人になってから、初体験までを書いていきます。かなり端折る形になってしまいました。

本当は、恋人同士のイベントを通して、二人がラブラブになっていくようにしたかったのですが…。

一話に膨らませるようなネタがなく、クリスマス以外は、数行程度、

触れるだけになりました。

（第三章について）

第三章は、少しずつすれ違う二人を書きましたが、ここが一番、難しかったです。

上手く伝わったでしょうか？

正宏と瑞希以外の登場人物を上手く動かすことが出来ず、中途半端な中だるみの章になってしまいました。

もう少し、上手く描ければ良かったのですが…。

（第四章について）

第四章は、二人の別れまでを書きました。【五】はオマケみたいなものです。無くても良かったのではないかとおもいます。

二人が破局した原因については、「たったそれだけのことで？」と、思ってくれば幸いです。それが狙いです。

以下、ネタバレ注意！！

（最終章について）

大人になった正宏と話しているOLは、大人になった神崎瑞希です。各章の【序】では、隠すように書いたつもりでしたが、読み返してみると、バレバレですね…。

瑞希は、話している相手が正宏だと気付いています。正宏は、相手が瑞希であるとは、最後まで気付いていません。

二人がお互いのことに気付く、再び結ばれるというラストも考えましたが…、この形にした方が、面白いと思ったので…。

そういうラストじゃありません！という意味の伏線として、正宏は、既婚で妻は妊娠中という設定にしました。

正宏は、トラウマを抱えたままの瑞希を忘れて、自分ばかり幸せになったわけでは、決してありません。

その辺のことは、番外編で書きたいと思います。

以上、作者の呟きでした。

（人物紹介と補足）

『水野正宏』

本編の主人公。

身長186センチで結構イケメン。

それなりにモテると思われるが、好きな女の子に対して一途な為、それ以外の女性からの好意の視線には気付かない。

ごく普通の思春期の男子をイメージしていましたが、話が進むに連れ、酷い男になってしまいました…。

『神崎瑞希』

話し好きで明るい女の子。

ちよつと天然。

身長160センチ。

中学時代は、真面目な優等生の外見だったが、高校生になると、イメージチェンジをする。

下ネタも平気なオープンな性格だが、正宏に本音を隠して付き合いを続けていた。

正宏のことは、『マサ君』と呼ぶ。

『高木（名前は不詳）』

正宏のバスケ部の先輩。

身長180センチ弱。

中学時代は、正宏と瑞希のキューピッドになれず、高校時代は、正宏と瑞希の仲を掻き回す存在にもなれず、中途半端な人物になってしまいました…。

『滝本由香』

東高校バスケ部マネージャー。

身長160センチ弱。

正宏の先輩で、正宏にとって二人目の恋人。

いつもニコニコしていて可愛らし娘。

正宏に瑞希がいる間は、おとなしくしていたが、二人が別れた後は積極的になり、念願叶って正宏と付き合い始める。

正宏と別れる時、彼にトラウマを残す。

正宏のことは、最初から最後まで『水野くん』と呼ぶ。

『水野美咲（旧姓 大野美咲）』

正宏の妻。

正宏より三歳上の、姉さん女房。

身長176センチで、女性にしてはかなり背が高い。

最終話の時点で、結婚一ヶ月、妊娠六ヶ月。

正宏のことは、『マー君』と呼ぶ。

彼女を主人公にした番外編を書きます。

詳しくは、そちらを御覧下さい。

番外編【一】 大男と大女（前書き）

番外編は、最終話の時点から少しさかのぼり、正宏の妻、美咲の目線の話です。  
四話あります。

番外編【一】 大男と大女

ドン！

「きゃー！」

「イテー！」

その日、急いでいた私は、会社の中で、一人の男にぶつかる。

会議に使う資料が足りなくて焦っており、周りをよく見ていなかった私が悪いのだが…。

飛び散った資料を、一緒に集めてくれていたその男に向かって、暴言に近い言葉を放つ。

「ボーツと吊っ立ってたら、危ないでしょ！」

「すみませんでした…。場所が分からなくて…。」

190センチ近くある大男が、床に這いつくばって、散らばった紙を集めている姿は、ちよつと可愛かった。

「キミ、見たことない顔だけど、新人？」

「はい、そうです。新人研修の場所が分からなくて…。」

「それだったら、突き当たりを右に入った所だと思っよ。」

「ありがとうございます。…じゃなくて、本当にすいませんでした。」

「…！」

一足先に立ち上がったその男は、まだ床に膝を付いていた私に向かって、手を差し出す。

その姿に、急に胸が高鳴る。

（えっ、何？このドキドキって…。）

私は、胸の内を悟られないように、平静を装いつつ、その手を取る。

「本当にすいませんでした。」

最後にその男は、少し微笑みながら、もう一度、頭を下げ、背を向けて行ってしまった。

私は、しばらくの間、呆然としてその背中を見ていた。

（私が見上げる程の男なんて…。）

（ちょっと、格好良かったかも…。）

（名前…、聞けば良かった…。）

（ヤバイ、私、ちょっとヤバイかも…。）

社会人四年目に突入した、四月の初頭。

私は彼と出会った。

友人に言っても、誰も信じてくれないし、馬鹿にされるだけだが…。

私はこの時、『この人と結婚するかも』と思った。

私は、はっきり言って、モテない女だ。

顔は悪くないと、自分では思っているが、身長が180センチ近くある大女だ。

モテないのは、身長の所為だけではないが…。

子供の頃から背が高く、身長を生かす為に、バスケットを始める。

高校の時には、全国大会に出たこともある。

私は女であるが、ノリは体育会系で、男友達も多い。

しかし、恋愛関係に発展することは、全くなかった。

『お前は男友達みたいだ』

私の男友達共は、示し合わせたように、同じことを言う。

私は、一応、女だし、彼氏が欲しいに決まっているのだが…。

そんな自分を変えようとして、高校の時は短かった髪を、大学生になっただら伸ばしてみる。

しかし、周りで、私を女として見てくれる男は、一人もいなかった。

唯一、あの背の高い男を除いて…。

あの日から、ひと月ほどたった四月の終わり頃。

仕事中、上司に呼ばれる。

「今年、うちの部署に、新人が配属されることになった。お前は四年目になったし、面倒を見てやってくれ。」

(チツ、メンドくさ…。)

新人の教育係を、押し付けられる。

私は、友達が全くいないわけではないが、女性同士の付き合いが得意ではない。

私が、ちょっと厳しいことを言っただけで、大抵の女性は近寄って来なくなる。

この時、二十代半ばにして、既に『お局』扱いだっただ。

私の女友達は、私に言い返してくるような、私に似た性格の娘達しかいない。

その新人は、私の女友達のような性格とは限らないし、面倒くさいこと、この上なかった。

私が、教育係に指名されたのだから、その新人は女性だと、信じて疑わなかった…。

そして、新人配属の日の朝、上司に呼ばれ、嫌々、席を立つ。

「彼女がお前の教育を担当するから、分からないことは、彼女に聞くように。」

その新人を紹介された私は、驚いていた。

なんと、背の高い男だったから…。

「お、大野美咲です…。宜しく…。」

「初めまして、水野正宏です。宜しくお願ひします。」

深々とお辞儀をする彼。

そして、彼が顔を上げ…。

「…。」

（ん？）

「…。」

（どっかで、見たことがあるような…。）

そして…。

「「あつ、あの時の！」「」

二人が同時に発した言葉は、見事にハモツた。

番外編【二】 女性恐怖症の男

「俺が、持ちますよ！」

「平気だつて！」

会議で使う大量の資料を、どっちが持つかで議論する。

「大野さんは女性なんだし、こういうことは、男である俺がやらな  
いと。」

「そ、そう？じゃあ、お言葉に甘えて…。」

彼に、女として扱ってもらい、ムズ痒い気分になる。

(実際にされると、気持ち悪いな…。)

彼は他の男と違い、私を一人の女性として見てくれていた。

そんな彼に、どんどん惹かれていき、『好きだ』という気持ちが抑  
えきれなくなっていく。

彼の方はというと…。

私が、何気なく周りを見渡すと、彼と目が合うことが徐々に増えて  
いく。

そんな時、決まって彼は、顔を少し赤くして、すぐに目を伏せる。

（彼も、私が好きなのか？）

そう思う場面が多々あった。

しかし、彼は一筋縄ではいかなかった…。

その年のクリスマスイブ、一世一代の決心を持って、彼を食事に誘ってみる

彼は、二つ返事でOKする。

（もしかして、もしかするかも…。）

（だって今日は、クリスマスイブだよ！）

独身同士で、お互い恋人もいない同士の男女が、クリスマスイブにデートらしきものをする。

適齢期の私に、『期待するな』という方が無理な話だ。

抑えきれないドキドキを、彼に悟られないようにするのに一生懸命

だった。

私は、内容のない話や仕事の愚痴を、エンドレスで話し続ける。

聞き上手な彼は、相づちを打ったり、ツッコミを入れたりしながら、嫌な顔ひとつせず聞いてくれる。

しかし、私が期待した言葉は、中々、彼から出て来ない。

私は酔いも手伝い、核心に近いことを聞く。

「水野は、彼女を作らないの？」

「作らないってわけじゃないですけど…。」

妙にソワソワし始め、私をチラチラ見る。

（よし！間違いない！）

彼の態度を見て、確信めいたものを感じる。

が、しかし…。

「水野は、結構モテる…でしょ？」

「うーん…、どうなのでしょう…。」

私の誘導に、彼は乗って来ない。

「…。」

(私が、『彼女』になってあげようか?)

私も、その言葉が言えない。

「俺…、女性恐怖症みたいなんです…。」

「えっ?」

(何よ、それ…。)

「ちょっとしたトラウマがあつて…。」

「私のことも…怖いのか?」

「…?大野さんは、怖くない…ですけど?」

(やっぱり、お前もそうなのかよ!)

「ちょっと、ショックだな…。私も一応、女んだけど…。」

「あつ、違うんです!そういう意味じゃなくて、女の人自体が怖いんじゃないくて、女の人を好きになるのが怖いんです。」

「そうなの…。」

(私にとっては、どっちでも同じようなもんだよ…。)

「恋人は欲しいんですけど、どうしても踏み出せなくて…。」

その日、やけ酒気味に飲んでしまった私は、帰る足取りもおぼつか  
なかった。

そんな私を、家まで担ぐように運んでくれた彼。

辛うじて、意識だけはあった私は、彼にお礼をしようと思っ…。

「ちょっと上がってく？お茶ぐらいだすよ。」

一人暮らしのアパートに、彼を招き入れようとする。

「そんな、とんでもない！一人暮らしの女性の家に上がるなんて！  
そういうことは、正式に付き合ってから、改めて…。」

『正式に付き合ってから、改めて…。』

朦朧とする意識の中、その言葉だけは聞き逃さなかった。

『一晩中、男女二人だけでも何も起こらなかった』という武勇伝？  
を持つ私。

彼を家に入れることについて、深く考えていなかったのだが…。

彼は、私を女として見てくれていた。

(彼も、私のことが好きはず。)

(彼の中では、私は『女』なんだ…。)

失恋に近い状態だったが、私は何だか嬉しかった。

それから私は、彼を頻繁に食事に誘う。

彼は、一度も断らない上に、喜んで付いてくる。

私が奢るわけでもない上に、割り勘どころか、彼の方が、いつも多めに支払いをするにも関わらず…。

彼と出会ってから一年が経ち、私が彼の教育担当を離れる頃、初めて、彼の方から食事に誘ってきた。

いつになく真剣な顔で…。

(だから、私を期待させないでよ…。)

彼の女性恐怖症が治るのを、長い目で見ようと思ってはいたが、彼の態度に、またしても期待してしまっ。

「一年間ありがとうございました。大野さんには、色々、助けたい  
ただいて。」

「…それだけ？」

「えっ…、どういう意味…ですか？」

「ううん…。何でもない…。」

私の期待は、またしても裏切られた…。

「今日も、送って行きましょうか？」

「今日は平気…。タクシーで帰るから…。」

「…何か…怒ってます？」

「怒ってないよ…。」

別れ際、少し不機嫌だった私を見て、彼は怪訝そうな顔を見せた。

そして私は、精一杯の笑顔で彼に別れを告げ、背を向けたが…。

意を決して、振り返る。

「ん？」

その私の行動を、彼は不思議そうに見つめる。

「あの…、えーと…、何て言ったらいいか…。」

「…？」

「私…、水野のことが好き！」

「えっと…、俺も…ですけど…。」

私は、気が付くと彼に抱き付いていた…。

人の往来の、ど真ん中で…。

番外編【三】 草食系の男

「ねえ、マー君。」

「何ですか美咲さん。」

私は、彼を『マー君』と呼ぶ。

最初は、そう呼ぶのは恥ずかしかったが、半年もすれば慣れた。

彼は、私を『美咲さん』と呼ぶ。

『さん』はいらないと、私は言うのだが、彼は一向に直さない。

しかも、今でも私に敬語で話す。

まるで、私が彼を尻に敷いているようで、バツが悪いのだが…。

「長年の習慣だから、直せないんですよ!」

「前は、長い間、付き合っただけならそのうち直るって、言ってなかった?」

彼が私を好きでいてくれるなら、どっちでもいいことかも知れないが…。

彼と私が恋人になったことは、会社内では一応、秘密だった。  
社内恋愛禁止というわけでもないが…。

会社では、『マー君』とは呼ばないように気を付けてはいたが、一度だけ同僚達の前で、そう呼んでしまったことがある。

その時は、何とか誤魔化したつもりだったが…。

私達の関係を、同僚達は気付いていながら、知らない振りをしてくれているみたいだった。

「水野をお前の下に付けて、正解だったかな？お前は、いつか俺に、このことを感謝する日が来るぞ！」

上司は私にそう言って、意味深に笑う。

「どつという意味…ですか？」

「言葉通りの意味だよ。」

（もしかして、コイツはこうなることを狙ってたのか？）

実際にそうなる日は、来たのだが…。

少なくともこの上司は、私と彼の関係には気付いていたようだ。

付き合い始めて半年が経った頃、ちよつとした疑問がわいてきた。

彼と一緒にいるのは、楽しいのは確かだったが…。

(『彼氏』と『彼女』って、こんな感じでいいの?)

この頃の私達は、まだ、手すら繋いだことがなかった。

文字通り、『手を出して来ない』彼。

(男の人って、女の人に、『あんなこと』や『こんなこと』をした  
いものじゃないの?)

彼氏いない歴と年齢が同じの私には、よく分からなかったが…。

『美咲の彼氏は草食系』と、友人達に断言された。

(私に、女としての魅力が足りないから?)

(もしかしたら、『付き合いってる』と思ってるのは私だけ?)

そんなネガティブ思考に陥った。

「私はマー君の何?」

彼に確認してみる。

「『彼女』、ですけど…。」

私の考え過ぎだったようで、ホツとした。

「だったら、敬語はいらなくない？あと、『さん』もいらない。私のこと、『美咲』って呼んでよ！」

この議論が、二人の間でなされたのは、この時が初めてだった。

「急には無理です。長い間、一緒にいれば、そのうち変わると思いますが。」

二人の關係に、線が引かれているような気がして、私は嫌だった。

それから数日後の、デートの帰り。

私を、いつものように家の前まで送ってくれた後、別れを告げて帰ろうとした彼。

私は、咄嗟に彼の手を掴んだ。

「ちょっと上がっていきなよ。お茶ぐらい出すよ。」

あの時の私は、よくこんなことが言える勇気があったなあと、自分でも感心してしまう。

「だから、一人暮らしの女性の家に上がるのは、まずいですよ！」

「『正式に付き合ってる』から、いいんでしょう？」

「そうですね…。」

「…。」

私は、潤んだ瞳で彼を見つめる。

演技ではなく、素で泣きそうだったのだが…。

私の目力は、彼を引き留めることに成功した。

取り敢えずお茶を出し、意を決して彼の隣に座り、彼を見つめる。

彼と目が合った時、私は目を閉じた。

二人の唇が離れたあと…。

「今日…、泊まってく？明日、休みだし…。」

私は、勢い余って、とんでもないことを口走ってしまった。

「美咲さん…、自分が何を言ってるか、分かってます？」

私はもう、子供ではない。

これが、どういうことを意味するかぐらい、百も承知だった。

「分かってるよ…。大丈夫…。」

勢いがないと、中々、決心出来そうもないことだったから…。

初めてのその行為は、正直、痛かったが、涙が出る程、嬉しかった。

（『初めて』って、絶対バレたよね…。）

その辺のことについて、彼は特に触れて来なかった。

彼は恐らく、初めてではなかったと思われるが、私も特に触れなかった。

何故なら、そんなことが消し飛ぶぐらい、幸せだったから…。

「俺…、色々、歯止めが効かなくなったらすみません…。」

「『歯止め』って？」

「…。」

彼は、私の質問には答えられなかった。

番外編【四】 雨男と晴女

(どろじょうぶ…。)

(彼に何て言おう…。)

彼と出会ってから、二度目の春を迎えた頃。

その日、私は自宅のトイレで頭を抱えていた。

手に持った妊娠検査薬は、陽性を示していた…。

心当たりはある。

『酔った勢いで』ってやつだ。

間違いなく彼の子供なのだが、私は素直に喜べないでいた…。

「大事な話って、何ですか？」

彼は、いつもと何ら変わりが無い。

私は、心中穏やかではないが、出来るだけ表に出さないようにしていた。

「マー君…、女性恐怖症とやらは治った？」

「今更、何を言ってるんですか！治ってなきゃ、美咲さんと付き合  
ってないですよ！それに、あれは、俺がびびってただけです。」

「何でびびってたの？」

「うーん…、それは言わないとダメですか？」

「言いたくないなら、無理には聞かない…。」

表面上は、問題ないように見える彼だが、『トラウマ』は、結構、  
根深いものかも知れない。

「美咲さんのことは、ちゃんと好きです…。結婚だって…。」

最後は、言葉を濁した彼だが、その言葉に勇気を貰った。

「実はね…、大事な話っていうのは…。…出来た…かも知れない…。」

「何がですか？」

「赤ちゃん…。まだ、確定したわけじゃないけど…。」

「…。ホントですかー！！！！」

一瞬、間を置いた後の彼の反応は、私の想像と少し違った。

彼は、何だか嬉しそうだった。

「どっしょよっ…か？」

「『どっしょよっ』って…。結婚しましょう！」

「結婚…してくれるの？」

「当たり前じゃないですか！美咲さんの両親に、挨拶しに行かないといけないですね！それに、住む所を探さないと！後は、もっと頑張らないと！」

興奮気味の彼だったが…。

「マー君…、うちの父親に殴られるかもよ…。」

「それぐらい大丈夫ですよ！死ぬわけじゃないし。それより、好きな人と結婚出来る方が嬉しくて！」

彼は、涙を流しそうな勢いだった。

「嬉しそうだね、マー君…。」

「嬉しいに決まってるじゃないですか！美咲さんが、俺の奥さんになるんですよ！」

「ふふっ…。」

私は、喜ぶタイミングを逃し、苦笑いを返すことしか出来なかった。

「…？もしかして…、美咲さんは、あんまり嬉しくないんですか？」

「そんなことはないけど…。」

「仕事を辞めたくないとか？それだったら、産休を取ってから復帰すればいいじゃないですか！」

「イヤ、結婚したら、仕事は辞めるけど…。」

後日、産婦人科に行き、私の妊娠は確定した。

その時、私は、『一人で大丈夫』と言ったのだが、彼は、強引に付いて来た。

彼は、そこでも大喜びし、周りの失笑を買っていた…。

彼と出会う前は、想像もしていなかった形で、私に家族が増えることになった。

しかも、一気に二人も…。

いつかの私の予感は当たり、上司の策略通り、私達は結婚することになった。

そしてその後、大した騒動も無く、私達は一足先に一緒に暮らし始めた。

私のお腹が、少しだけ目立ち始めた頃、ささやかな結婚式を上げる。

その前日。

「明日、晴れますかね？」

天気を気にする彼。

「明日は、いい天気らしいよ。」

「美咲さんって、『晴女』ですか？」

「さあ、どうだろう？気にしたことないからなあ。」

「俺は、『雨男』らしいですけど…。」

彼はそう言って、少しだけ悲しそうな顔をした。

『雨男』かどうかなんて、気の持ちようだと思うのだが…。

(もしかして、女性恐怖症気味だったことと、関係があるのかな?)

彼の『トラウマ』について、結局、私は聞いていない。

彼が話す気になれば、いつか話してくれるだろう。

それまでは、聞くつもりもない。

何故なら、私にとっては、さして重要なことではないからだ。

(でも、どっちかが死ぬ前には、聞いてみたいかな?)

く番外編 完く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0292q/>

---

雨男、雨女

2011年2月8日18時27分発行